

博 多 140

— 博多遺跡群第187次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1091集

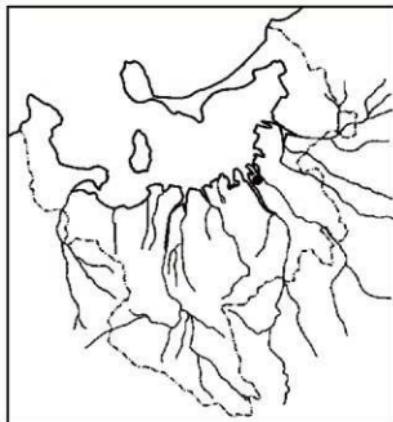
2010

福岡市教育委員会

博 多 140

— 博多遺跡群第187次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1091集



HKT-187
0842

2010

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では近世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2010年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

□本報告書は博多区奈良屋町100番、101番の共同住宅建設に伴って2008年10月1日から11月7日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第187次調査の報告書である。

□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。

□遺構の実測、遺構・遺物の写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子・平川敬治が、製図は熊谷幸重が担当した。

□本書で用いた方位は磁北である。

□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0842	遺跡番号	0121	分布地図番号	千代博多 48
調査地地番	福岡市博多区奈良屋町100番、101番				
開発面積	385m ²	調査面積	143m ²	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2008.10.01～2008.11.07			担当者	屋山 洋

本文目次

I はじめに	1
II 調査の記録	3
1 調査の経過	3
2 調査の概要	3
3 遺構と遺物	6
1) 溝	6
2) 井戸	8
3) 板組み遺構	11
4) 石積土坑	12
5) 土師坏廃棄土坑	21
6) 土坑	25
7) その他の出土遺物	27
1. 包含層出土遺物	27
2. 磚石	33
3. 銅錢	34
4. 銅製品	34
III 小結	34
IV 博多遺跡群第187次調査出土動物遺存体について	35

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点位置図 (1/4,000)	2
第3図 調査地点周辺図 (1/1,000)	3
第4図 調査区範囲図 (1/200)	4
第5図 調査区全体図 (1/80)	5
第6図 溝実測図 (1/40)	6
第7図 溝出土遺物実測図 (1/3)	7
第8図 SE1007 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)	9
第9図 SE1007 出土遺物実測図 (1/3)	10
第10図 SK1010・1011 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)	11
第11図 SK2006 遺構実測図 (1/30・1/40)	12
第12図 SK2005 遺物実測図1 (1/3)	13
第13図 SK2005 遺物実測図2 (1/3)	14
第14図 SK2005 遺物実測図3 (1/3)	15
第15図 SK2005 遺物実測図4 (1/3)	16

第16図 SK2005 遺物実測図 5 (1/3)	17
第17図 SK2006 遺物実測図 (1/3)	18
第18図 SK2008 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)	19
第19図 SK2008 遺物実測図 (1/3)	20
第20図 SK2009 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)	22
第21図 SK2009 遺物実測図 (1/3)	23
第22図 SK2010 遺構・遺物実測図 (1/20・1/3)	24
第23図 土坑実測図 (1/40)	26
第24図 SK2004 出土遺物実測図 (1/3)	27
第25図 包含層出土遺物実測図 1 (1/3)	29
第26図 包含層出土遺物実測図 2 (1/3)	30
第27図 包含層出土遺物実測図 3 (1/3)	31
第28図 包含層出土遺物実測図 4 (1/3)	32
第29図 SK2008 出土礎石実測図 (1/6)	33
 表1 出土銅錢一覧	34
表2 出土動物遺存体一覧	35

図 版 目 次

- 図版1 1. 調査区全景 (第2面 北東から) 2. 調査区全景 (第3面 南西から)
- 図版2 1. I区2面 (南西から) 2. II区東側2面 (南東から) 3. SD2015・2016 土層 (南東から)
 4. SE1007 検出状況 5. SE1007掘り下げ状況 (南東から) 6. SK2010 (西から)
- 図版3 1. SK1010 検出状況 (南東から) 2. SK1010掘り下げ状況 (南東から) 3. SK1011 土層 (南東から)
 4. SK2003 (南東から) 5. SK2004 (南東から) 6. SK2005 土層の一部 (北西から)
- 図版4 1. SK2006・2008・2009 (南東から) 2. SK2006・2008 (南東から) 3. SK2005 (東から)
 4. SK2005 土層 (南西から) 5. SK2006 (南東から) 6. SK2006 石積み除去状況 (南東から)
- 図版5 1. SK2008 (東から) 2. SK2008 南西壁 3. SK2009 (南東から)
 4. SK2009 北西壁 5. SK2009 南西壁 6. SK2009 北東壁
- 図版6 1. SK2021 (北東から) 2. SK2024 (北東から) 3. SK2025 (南東から)
 4. II区3面 (南西から) 5. II区東側北壁土層 (南東から) 6. SK2008 出土礎石

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成19年(2007年) 10月1日付けで野村和子氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市博多区奈良屋町100番、101番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（19-2-509）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である博多遺跡群の中に位置するため、埋蔵文化財第1課では遺構の有無の確認が必要であると判断し、2008年5月15日に重機を使用して確認調査を行った。その結果、現地表面から深さ22mまでは近世の包含層で、その下に厚さ80cm程の近世以前に遡る可能性がある包含層と遺構が確認された。この調査結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成20年(2008年) 10月1日から11月7日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は表土の場外搬出やユニットハウスの設置などで原因者及び関係者各位の多大な御協力をを得た。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

埋蔵文化財第1課課長 (前)山口謙治 (現)濱石哲也

調査係長 米倉秀紀

調査庶務 (前)古賀とも子 (現)山本朋子

調査担当 屋山 洋

作業員 石田和子 岡部安正 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 鈴木誠 遠山勲 中村健三

夏秋弘子 西田由喜 平田周二 前田佳代 御手洗史子 吉田哲夫

整理作業 大石加代子 熊谷幸重 藤野洋子

3. 立地と環境

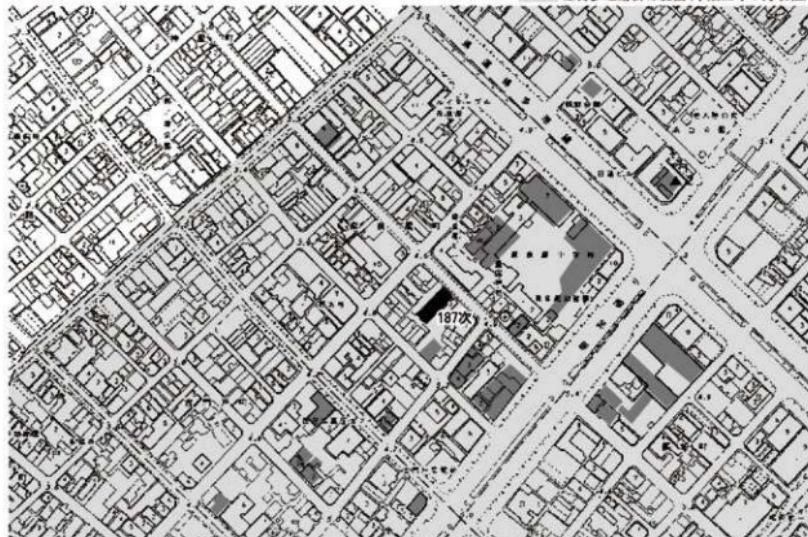
博多遺跡群は那珂川と御笠川によって運ばれた土砂によって形成された砂丘上に位置する。砂丘は大きく南北2つの砂丘に分かれるが、北側を中世の呼び名をもとに冲ノ瀬、南側を便宜上博多瀬と呼んでいる。内陸側の博多瀬では弥生時代以降連続として遺構が確認されており、13世紀中頃には砂丘を縱断するメインストリートができ、それを軸にした街区が形成されるのに対し、今回報告する第187次調査地点が位置する冲ノ瀬は砂丘としての発達が遅れたため、都市化が進む時期は博多瀬に比べるとかなり遅るものと思われていた。しかし、最近冲ノ瀬の西端で確認された12世紀末～13世紀初めに遡る東西方向の道路は14世紀頃に一度廃絶した可能性はあるが、その後16世紀末の太閤町割りによる大規模な区画の変更まで長期間継続すると考えられ、少なくとも冲ノ瀬の砂丘南部では12世紀末から13世紀前半の段階で計画的な街区の形成が進んでいたことが判ってきた。

本調査地点は沖ノ瀬砂丘でも北寄りに位置しており、第111次調査で確認された元寇防星の推定線よりも更に60m程海側に位置する。諸々の問題はあるものの太閤町割り以前の博多を描いたとされる『博多往古図』や『博多之古図』では元寇防星が博多の北限として描かれており、太閤町割りと黒田氏による埋め立てによって『福岡御城下絵図』（17世紀末）等に描かれる近世の博多に変化したものである。しかし周辺で行われた調査では防星推定線より南側の75・83・116次では現街区と方位が異なる街区が確認されているが、推定線より北側の69・131次では確実な遺構は確認されていない。今回の調査で中世後半の溝が確認されたことは街割りが元寇防星の北側に拡張する時期を知る手がかりとなるものである。

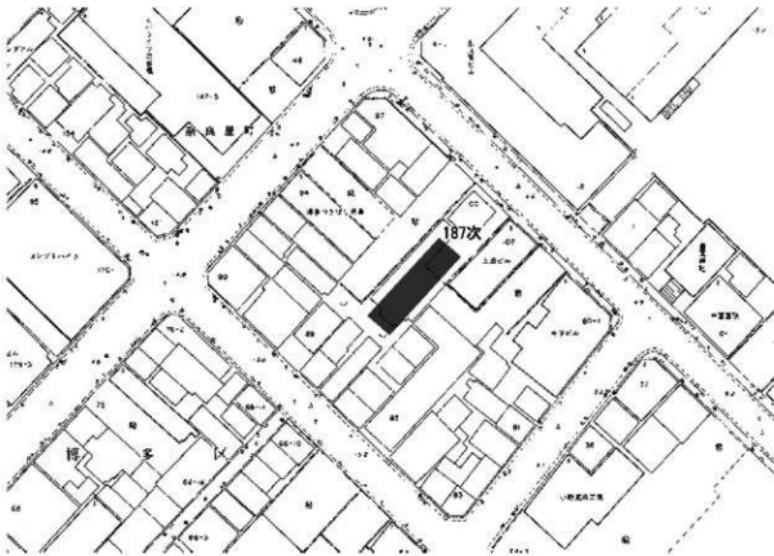


第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

■は博多遺跡群の範囲(平成22年1月現在)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



第3図 調査地点周辺図 (1/1,000)

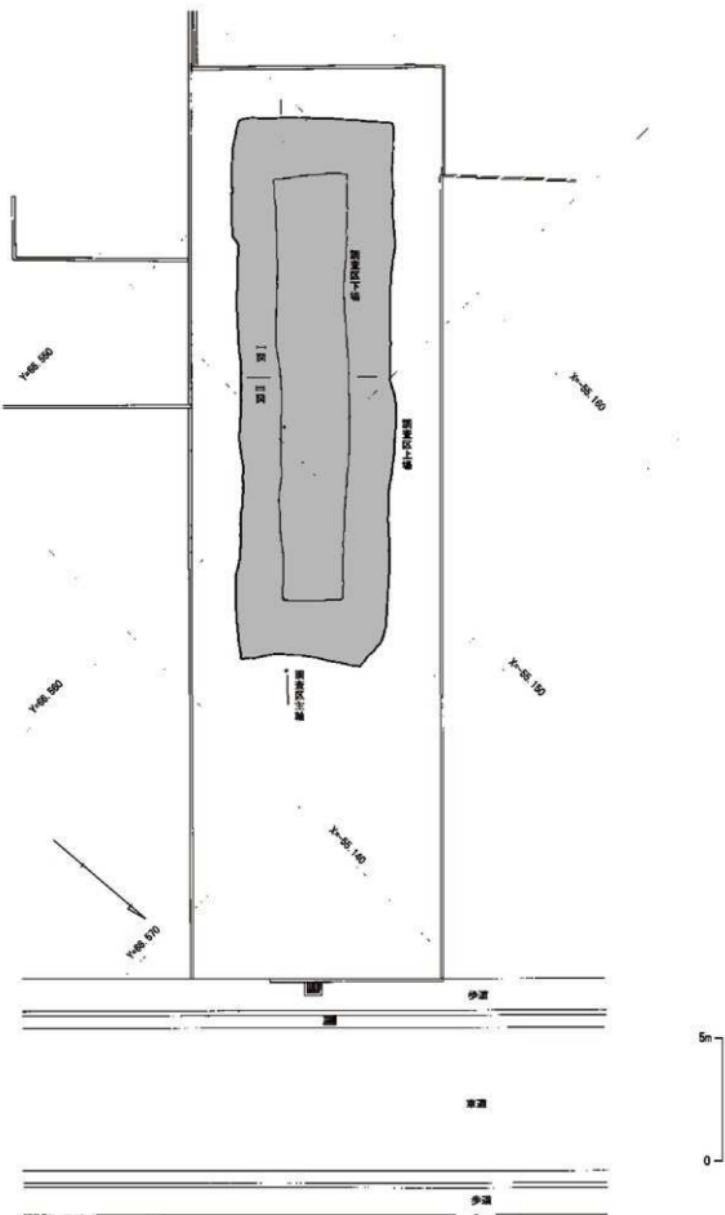
II. 調査の記録

1. 調査の経過

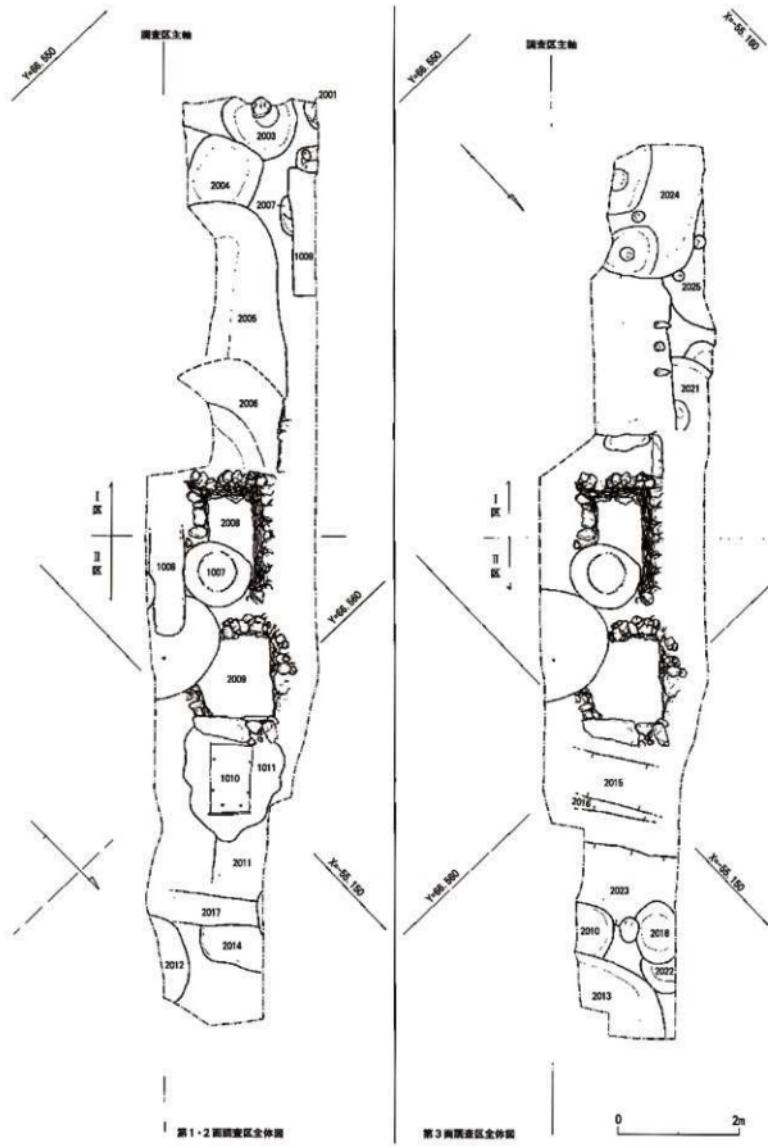
2008年9月末に原因者側による調査部分の表土の掘り取りと場外搬出が終了したため、10月1日に調査機材の搬入を行い発掘調査を開始した。まず標高1.6mに1面目の調査面を設定して遺構検出を行い遺構を掘り下げたところ、ほとんどが近代の擾乱だったため調査を中断し、遺構がある部分を残して標高1.2mまで掘り下げて2面目の調査を行った。3面目は標高0.9mの砂丘面上に遺構面を設定して調査を行った。調査区の両端では遺構を確認したが、中央部では2面目で検出した石積土坑の基底面が砂丘面まで達しており、下層の遺構は残っていなかった。調査は11月6日に終了し、11月7日に埋め戻しと機材の搬出を行い調査を終了した。今回の調査では敷地西側の173mが調査対象であったが、現地表面と遺構面との高低差が3mと大きかったため、調査区の周囲に幅1mの犬走りをとり、法面をつけて掘り下げた。そのため調査面積は概方上面で143m²、下場で51 m²にとどまる。

2. 調査の概要

調査区の南西側をI区、北東側をII区とした。検出した遺構は近世～近代が石積土坑3基(SK2006-2008・2009)と、瓦組みの井戸、土坑等である。石積土坑のうちSK2006はSK2008により壊されて一部しか遺存していない。SK2008と2009の2基はほぼ似たような規模で並んでおり同時並存の可能性もあるが、2基の接点部分が近代の井戸により破壊されており詳細は不明である。調査区西端に位置するSK2005はSK2006に繋がる長さ3m程の土坑であるが、埋土中には瓦や近世陶磁等多量の遺物が廃棄されていた。調査区東側では近世の土坑に切られる遺構の中に、中世まで遡る可能性がある土師坏廃棄土坑1基(2010)と溝3条(2015-2016-2023)を検出した。これらの溝は現在の地割りとは若干方位がずれており、太閤町割り以前の溝である可能性がある。また掘り直しを行っていることから、長期間使用されたと考えられる。



第4図 調査区範囲図 (1/200)



第5図 調査区全体図 (1/80)

3. 遺構と遺物

1)溝 5条検出した。

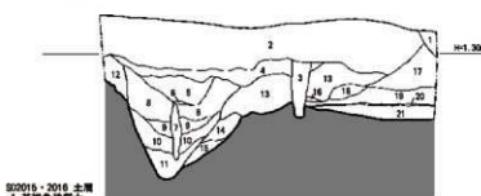
SD1008(第5図) 第1面の調査区中央で検出した。SE1007の掘方を切る。幅60cm前後、深さ5~10cmを測る。主軸は本調査区の南側隣地境界線と並行しており、N=44°-Eを測る。遺物は染付碗や鉢、陶器、瓦器、土師壺など近世後半の遺物が主であるが、1点現代のタイル片が出土した。タイルは直上まであった現代の機乱から紛れ込んだ可能性が高い。時期は近世後半~近代と考えられる。

SD2015(第6図) 第2面の調査区東側で検出した。SD2016が完全に埋没した後に同じ場所に同じ方位で掘り直した溝である。断面はV字型を呈し幅1m、深さ90cmを測る。覆土はレンズ状に堆積する。図6の第7層は木の根による擾乱である。第8層から下はしまりの弱い砂質土で自然堆積である。遺存状況はSD2015・SD2016とも第1面で検出したSK1010-1011に破壊されて残りが悪かったので、方位は南北両壁の土層を繋いで復元した。溝の主軸はN=33°-Wで現在の道路方向からは13°西にずれる。出土遺物は青磁碗I類、陶器壺(中世)、陶器、瓦質火鉢(15C)、土鉢(15C)、土師質擂鉢、土師質鉢(12~13C)、土師壺・皿(回転糸切り)、鉄滓、獸骨(1点)、白色化が出土しているがいずれも小片で図化できない。遺物の時期は15世紀を中心としており、溝の時期としては15世紀後半と思われる。

SD2016(第6図) SD2015と位置がほぼ重なっており、中央部を2015に切られる。断面はやや緩やかなV字型を呈し、幅1.4m前後、深さ1m弱を測る。覆土は褐色~黒褐色の砂質土で、堆積は若干レンズ状を呈す。遺物は出土していない。SD2015は2016が完全に埋没してから同じ場所に掘り直されており、時期的には2015の直前と考えられる。

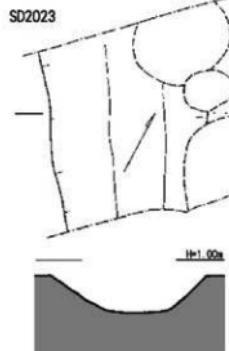
SD2017(第5図) 第2面の調査区東端で検出した。SK2011とSD2014を切り、SK2012に切られる。幅50cm前後、検出面からの深さは10cmを測る。主軸はN=37°-Eで調査区の北東側道路境界線とは9°のズレがある。覆土は地山の砂を主とするが、暗褐色土の粒子が多く含みやや汚れた感じをうける。覆土中から染付碗、三島手大皿、茶褐釉陶器鉢、黄褐釉壺、陶器擂鉢、灰釉鉢、瓦質火鉢、瓦質大鉢、瓦質擂鉢、土師壺・皿(うち2枚を灯明皿として使用)、七輪の火皿、土師質平瓦(凹面ナデ調整)が出土した。

SD2015・2016



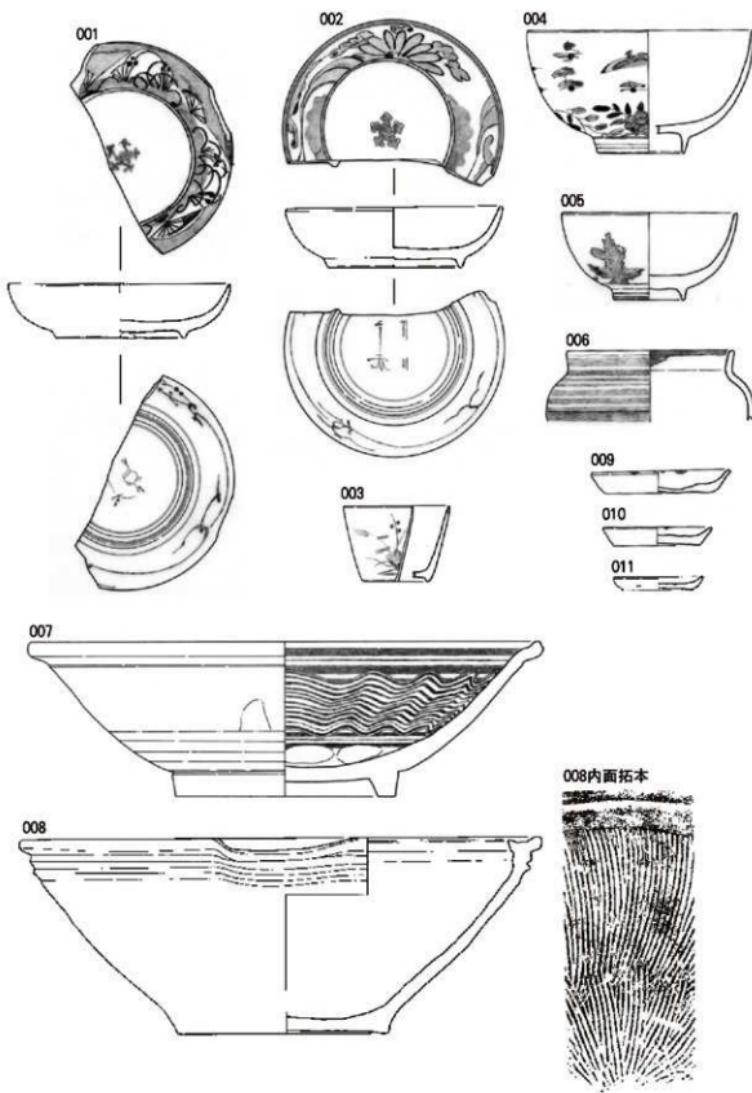
SD2015-2016 土層

1. 茶褐色砂質土
2. 暗褐色土
3. 黄褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土 黄褐色土小ブロックを含む。
5. 暗褐色砂質土 白色砂を多く含む。
6. 暗褐色砂質土 白色砂を多く含む。
7. 大の砂に上る擾乱
8. 反対側合跡
9. 黄白色砂
10. 黄褐色砂質土 やや粘性を有する。しまり弱い。
11. 暗褐色砂質土 粘化物を少含む。しまり弱い。
12. 暗褐色砂質土 白色細砂をブロック状に多く含む。
13. 暗褐色砂質土 白色細砂をブロック状に多く含む。粘化物小片含む。
14. 暗褐色砂質土 黄褐色土の塊を含む。汚れた状態である。
15. 黄褐色砂質土 しまり弱い。
16. 黄褐色砂質土
17. 暗褐色砂質土
18. 黄褐色砂質土 粘化物小片含む。
19. 黄褐色砂質土 黄褐色を層状に含む。
20. 粘化物層
21. 黑褐色砂質 地山の砂が粘化物粒子を含み汚れている。



0 1m

第6図 溝実測図 (1/40)



第7図 溝出土遺物実測図 (1/3)

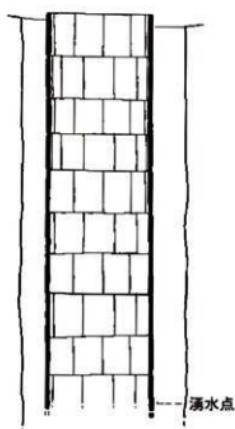
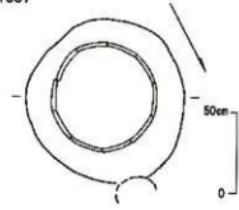
出土遺物(第7図001～008)。001・002は染付皿で内面口縁下に草花文、見込みに五弁花文を描く。外底部に銘がある。001は復元口径13.7cm、002は復元口径13.3cmを測る。003は猪口で復元口径6.5cm、器高4.6cmを測り、外面に草花文を描く。004・005は碗で外面に染付を施す。006は陶器壺で復元口径10.2cmを測る。外面は黒褐色と黄褐色の縞模様を呈す。内面は口縁のみ施釉する。007は陶器鉢で内面は赤褐色と白色の柳刷毛目文を施す。外面は灰褐色を呈し、胴部下半は露胎である。008は陶器片口擂鉢で赤褐色を呈し、胎土に5mm以下の白色砂を含む。口径31.9cmを測る。009～011は回転糸切りの土師皿である。口径と器高は009が8.5cmと1.4cm、010が6.7cmと1.1cm、011が5.5cmと0.8cmを測る。009と010は口縁に煤が付着しており、灯明皿として使用している。

SD2023(第6図) 第3面の調査区東側に位置し、SK2010とSK2018に切られる。幅130cm前後、検出面からの深さは30cm前後を測る。主軸は遺存が悪く判りづらいもののN-33°-W前後と思われ、15世紀後半の可能性があるSD2015やSD2016の主軸方向に近い。覆土は地山の黄褐色砂であるが粒状の黒色土を含み汚れた感じを受ける。溝の直上に暗茶褐色砂質土が被っており、その中に薄く黒色のドベが水平に含まれる。溝が埋まった後に波を被るか湿地状になった時期があると思われる。遺物は土師坏片2点と土師皿片1点しか出土しておらず時期は不明であるが、切り合から本調査区で検出した遺構の中では、最も古い遺構の1つである。

2)井戸

SE1007(第8図) 調査区中央の第1面で検出した。掘り方は円形を呈し径1m、検出面からの深さは3m以上を測る。掘り下げる時にSK2008の石壁を一部破壊しており、井戸の開削時にはSK2008は完全に埋没していたと考えられる。調査時は井戸枠を取り上げながら掘り下げたが、標高が-50cm付近で湧水し、掘り方の壁が崩壊しはじめたためそれ以上の掘り下げは中止した。井筒は瓦組みで径65～70cmを測る。一段で10枚の瓦を使用し、検出面から湧水面までで10段を確認した。取り上げた約100枚の瓦は大きさや厚みはほとんど同一で生産者を示すスタンプ等はない。出土遺物(第8-9図012～026)、012・013は井筒に使用していた瓦である。瓦は大体が20×25cm前後で厚さ3cm弱と大きさが揃った量産品である。色調は鈍い黒色を呈し、調整は全体にナデを施す。014は掘り方から出土した瓦質の火鉢である。明黄赤褐色を呈し、外面に線刻で唐草文を施す。015～026は井筒から出土した。015は染付碗である。焼成時に形が歪んでおり、このような不良品も流通していたことが判かる。016は染付皿で復元口径10.1cmを測る。017は盃で内面に染付を施す。松の輪郭と船は金色の彩色である。018は土師杯で外底部は糸切り後に回転ヘラケゼリを施す。口径11.8cm、器高2.1cmを測る。内面は全体に煤が付着しているが、特に内面の底部と口縁の一部に、また外面は底部に多く付着する。019は素焼きの壺で外側面に『昭和〇年八月』の墨書きがある。字幅から空白は一文字と思われ、井戸が埋められた時期は昭和初頭以降である。020は素焼きの蓋で口径3cm、高さ1.3cmを測る。021はガラス瓶で乳白色を呈す。化粧瓶か。022は須恵質の平瓦で凹面に斜格子タタキ、凸面に布目压痕がのこる。023は土製のおはじきで径1.9cmを測る。白色を呈し表面に藤の花のスタンプを施す。024は筒状土製品の破片である。内面に煤が濃く付着する。羽口などの送風管を繋ぐパイプか、煙突の根本部分ではないかと思われる。025は炉壁である。細長い煉瓦状の土製品で、これを積み重ねて小型の炉を築くものである。色調は片面が激しく被熱して灰黒色を呈すが、反対側の面も軽く被熱して淡い赤褐色を呈す。両面が被熱することから炉を作り直すときに再利用されたものと思われる。026は羽口である。残存長10.1cm、径6cmを測る。先端部は熱のため赤褐色を呈す。024～026は一連の作業に使用された可能性があり、昭和初期に周辺で小鍛冶等が行われていたことを示すものである。

SE1007

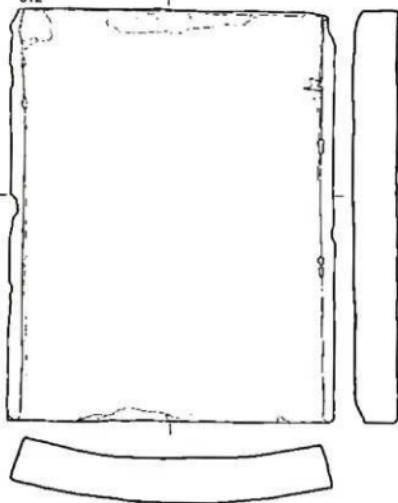


014

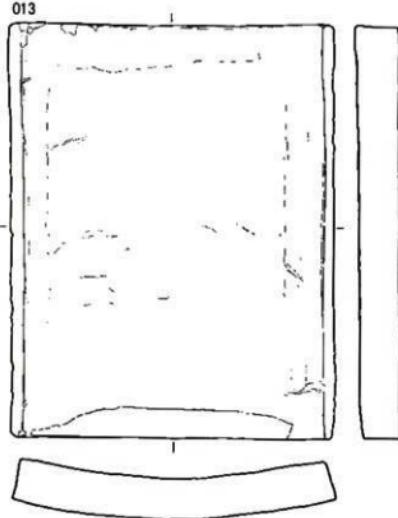


0 10cm

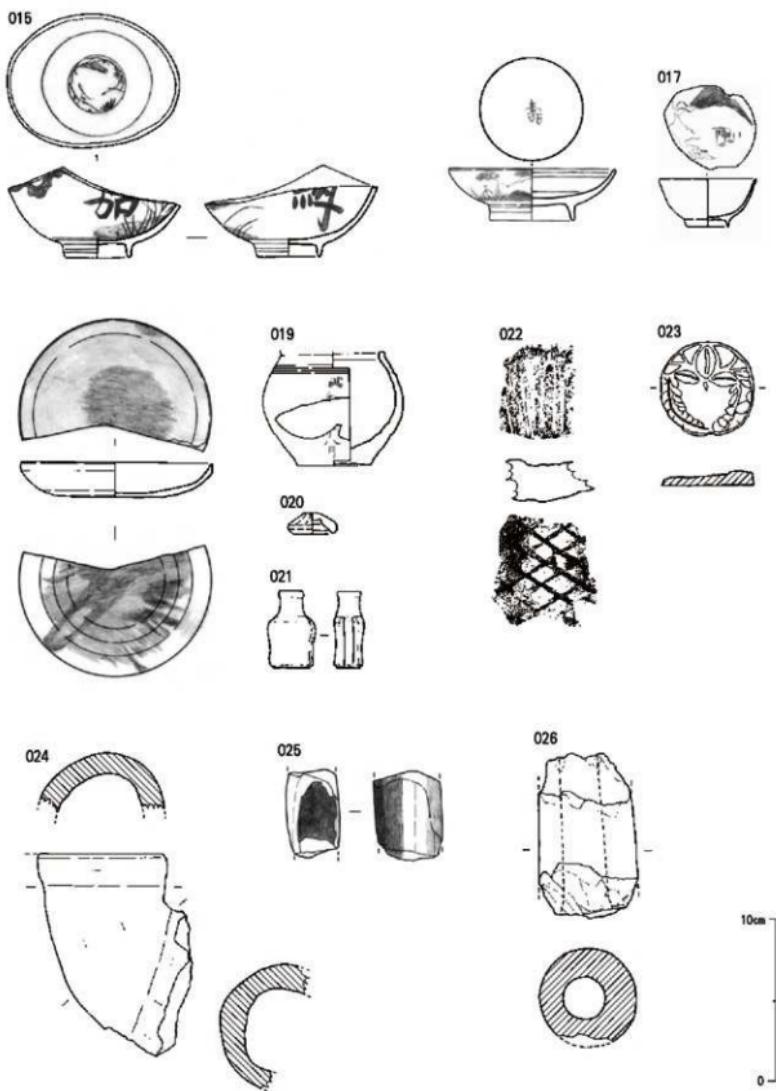
012



013



第8図 SE1007遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)



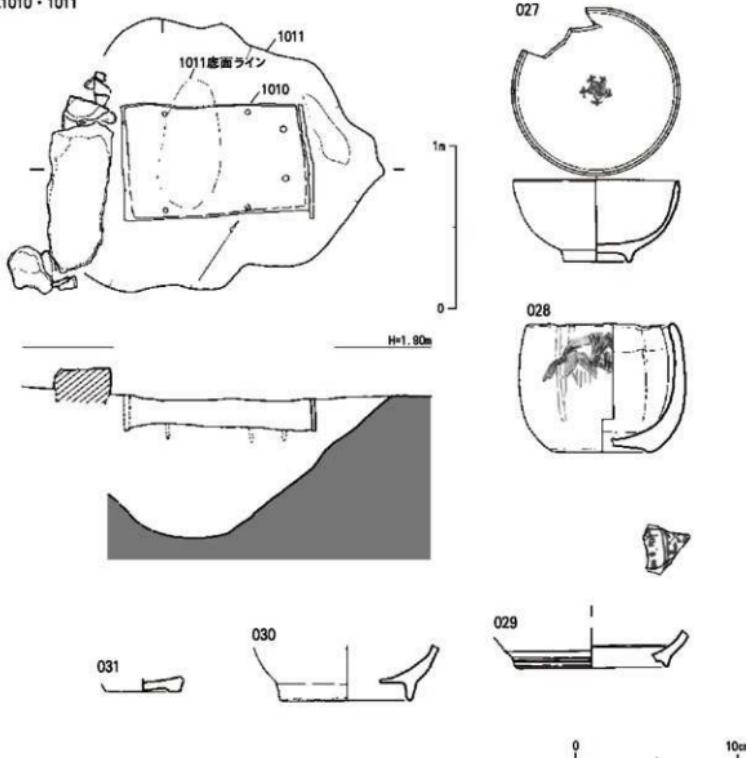
第9図 SB1007 出土遺物実測図 (1/3)

3) 板組み遺構

SK1010(第10図) 調査区中央東寄りの第1面で検出した。SK1011の中央に位置する。板を組んで箱状にした遺構で長辺110~120cm、短辺65~70cmの長方形を呈す。東側の板は2重になっている。底面は板を敷いていない。底面には若干の凹凸が見られ、西側を除いた3面では板の内側で杭の痕跡を2本ずつ確認した。杭は径3cm前後を測り、底面から杭先端までの打ち込んだ深さは約19cmと深く打ち込まれている。杭は板の倒壊防止の為と思われるが、東側小口では杭は板から10cm以上離れており、別の用途で打たれた可能性もある。板組みの中の埋土は灰褐色砂質土で1cm程の小礫と炭化物片を多く含む。埋土中に薄い白色砂層をレンズ状に含む。出土遺物(第10図027~031)。いずれも近世陶磁器である。027は明緑灰色を呈し、内底部に藍色の五弁花文を描く。028は染付輪花碗で灰白色を呈し外側に笠を描く。復元口径は9cm強を測る。029~031は陶磁器碗の底部である。

SK1011(第10図) 調査区中央東よりの第1面で検出した。不整形を呈し長辺1.9m、短辺1.6m、検出面からの深さ82cmを測る。断面は逆三角形を呈し、埋土は灰色砂質土で黄褐色粘土ブロックを全

SK1010・1011

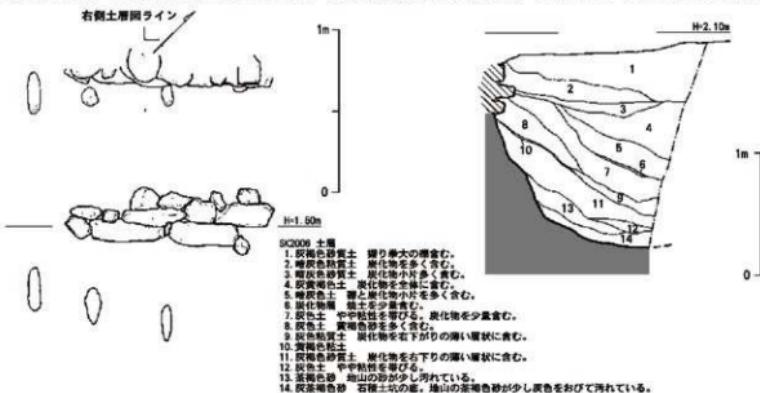


第10図 SK1010・1011 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)

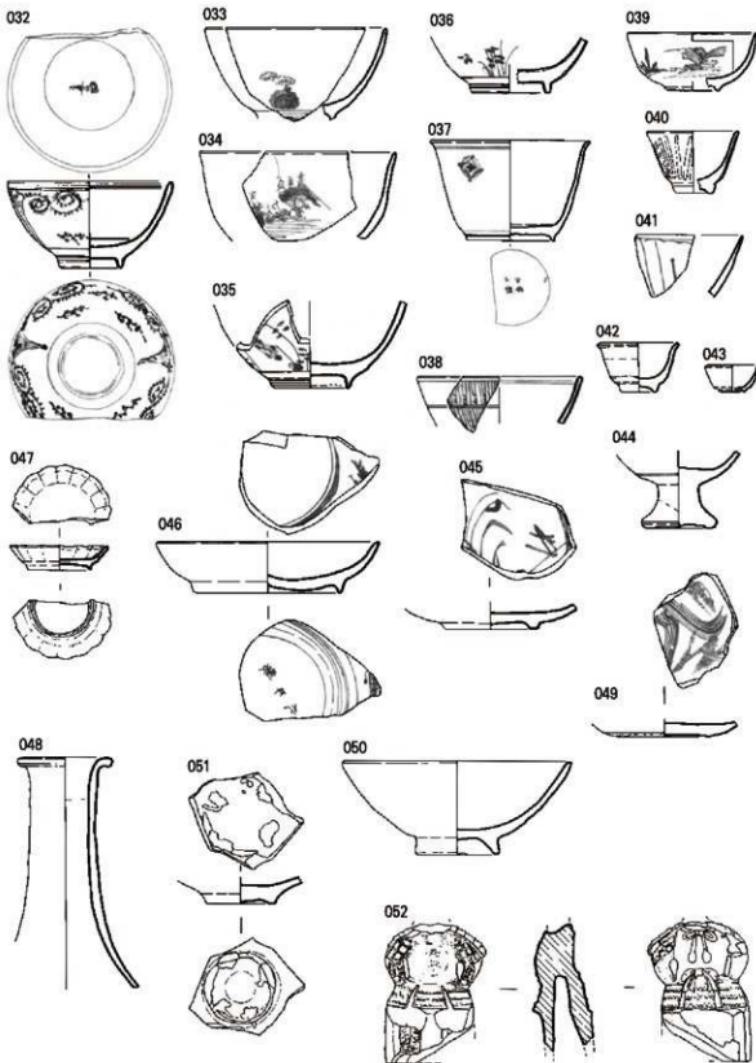
体的に含み、一度に埋めたものである。SK1010の板組み内の水抜きの為に掘られたと思われるが、断定はできない。遺物は陶磁器が出土しておらず、筒状土製品や瓦質鉢、土師質鉢(14~15世紀)、土師質大型鉢(近世後半か)、土鍋、土師壺皿(回転糸切り)、砥石(砂岩)、丸瓦(網目タキ)、土師質平瓦(強いナデ)等が出土したが小片のため図化できない。近世後半以降である。

4) 石積土坑 第2面の調査区中央で3基検出した。

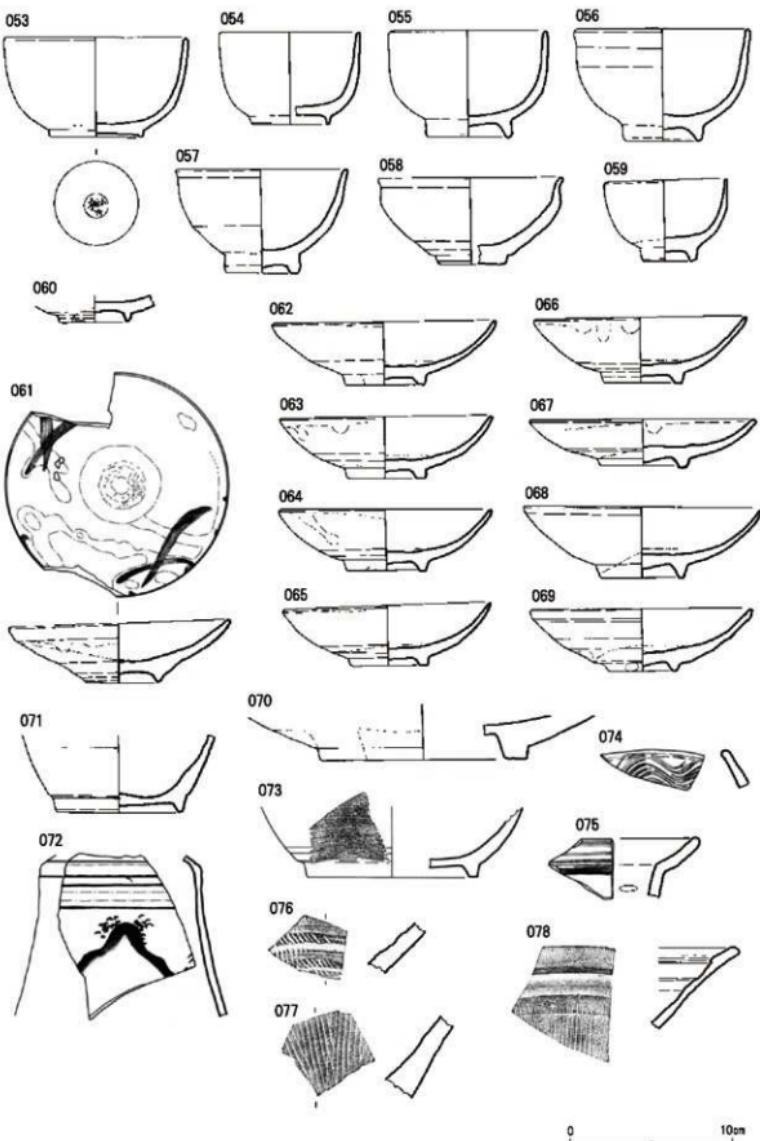
SK2006(第16図)3基中最も西側に位置する。東側をSK2008に接されており、遺存しているのは北西壁の一部分のみである。2008-2009の壁が床面まで石積みなのにに対し2006は壁の上端のみが石積みで、ほとんどは素掘りである。北壁石積みの高さは30cm程度であるが、素掘り部分を含めると床面からの高さは1.6mを測り、当初からそれ程高い石積みではなかったと思われる。また、南西壁は存在した痕跡がなく、石室は南西側に開口していた。石積みは下層2段は径40cm、厚さ15cm前後の平らな石、3段目は径20cm前後の石を使用する。素掘り部分の壁は崩壊を防ぐ為に緩やかなカーブを描き、床面はかなり狭くなる。石積み下端から底面までの高さは約1.2mを測る。石積み西側端部下の壁面で径10cm程度の柱穴3個が40cm間隔で並ぶ。入口部の天井を支える柱であると思われる。石室内の堆積はレンズ状を呈し、底面から上の40cm程度は崩落による堆積、上層の120cmは人為的な埋土である。SK2006の西側に続くSK2005は2006の入口部であると思われ、石積みの西端から3.2m西に延びる。出土遺物(第12~15図032~133)。032~125はSK2005、126~133はSK2006から出土した。032~048は近世磁器である。032~039は碗で外面に染付を施す。040~042・043は白磁の盃、044は仏飯器、045~046は染付皿、047は白磁小皿、048は白磁瓶である。049は同安窯系青磁皿で釉は緑かかった灰色を呈し、胎土は灰色で黒色微粒子が混じる。050・051は高麗青磁碗である。050は灰緑色を呈し、外面は白色の細かな斑点がある。胎土は灰色を呈す。051は碗底部で釉は灰色を呈す。胎土は灰色で白色砂粒と黒色粒を含む。内底部と疊付きに4個の目跡がある。052は陶器製武者人形である。頭部と左足先端を欠く。色調は淡黄褐色~灰色を呈す。下側に穴が開き、棒に差し込んで立てて使用する。053~060は陶器碗、061~069は陶器皿である。070は陶器大皿で、釉は黒色で褐色の斑文が入る。胎土は明褐色を呈す。071~073は陶器壺である。071の釉は赤味を帯びる灰色で淡青色の横線を施す。073は壺底部で釉が暗褐色、胎土は暗紅赤褐色を呈す。外面にヘラケズリによる浅い沈



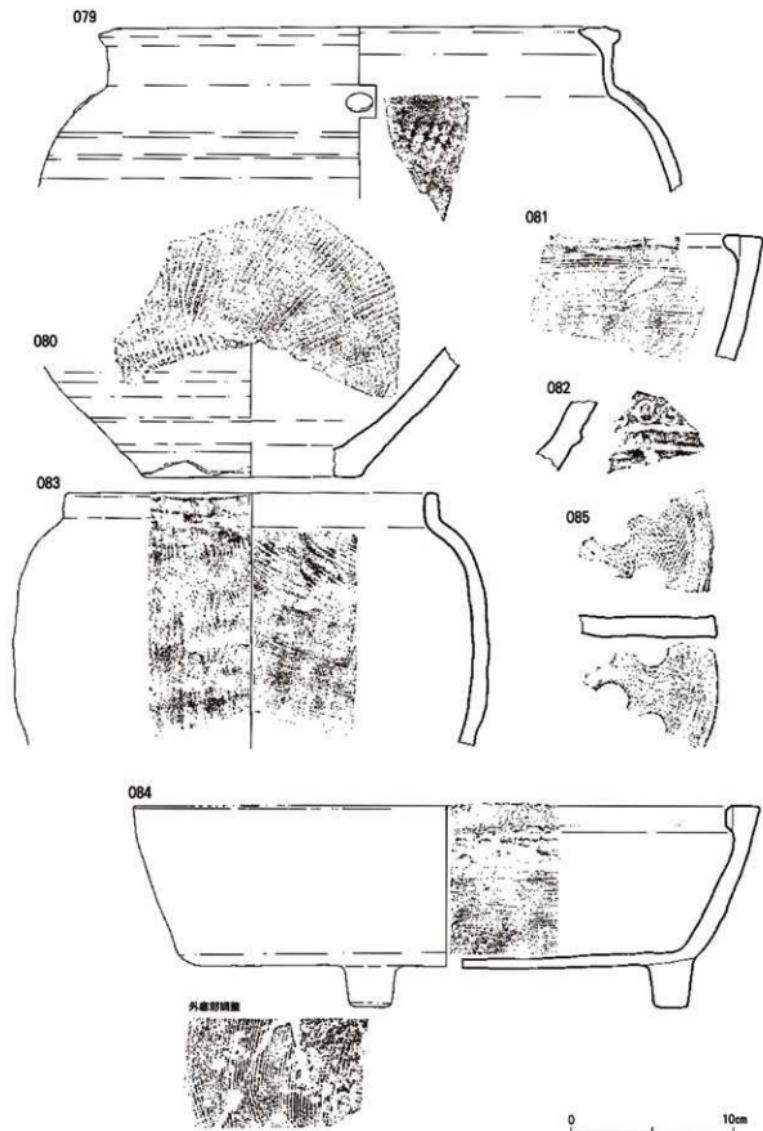
第11図 SK2006 遺構実測図 (1/30・1/40)



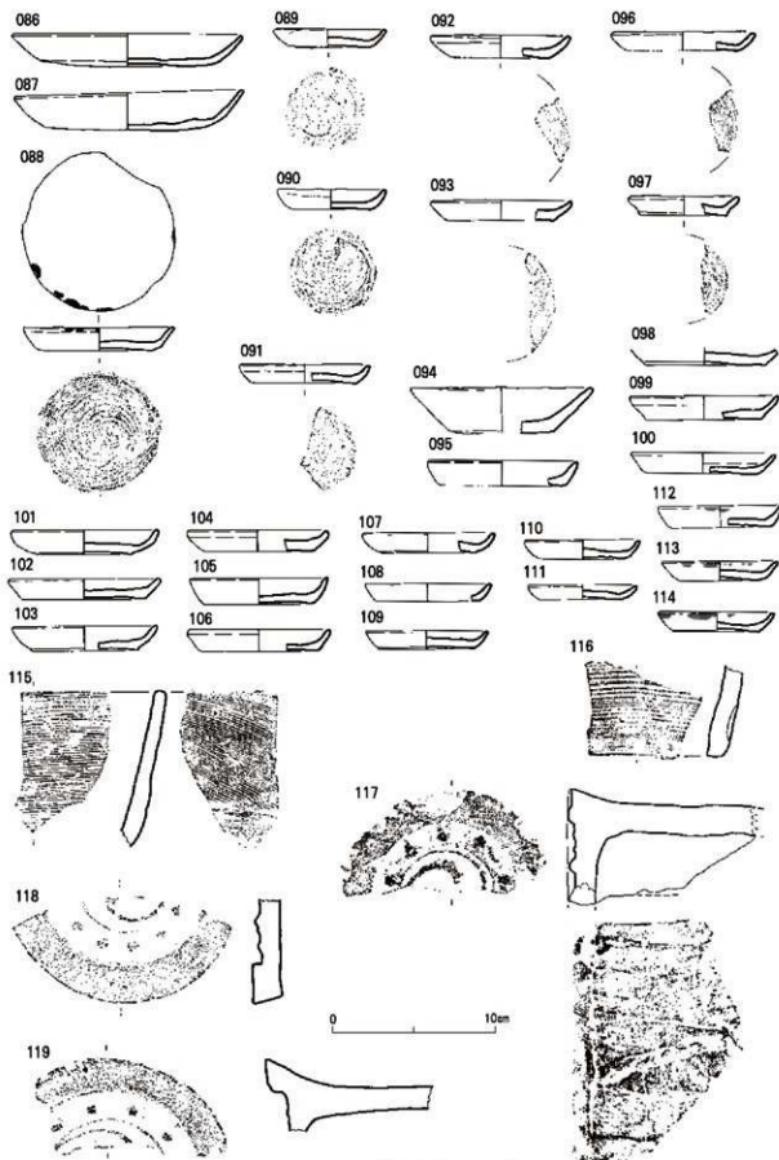
第12図 SK2005 遺物実測図1 (1/3)



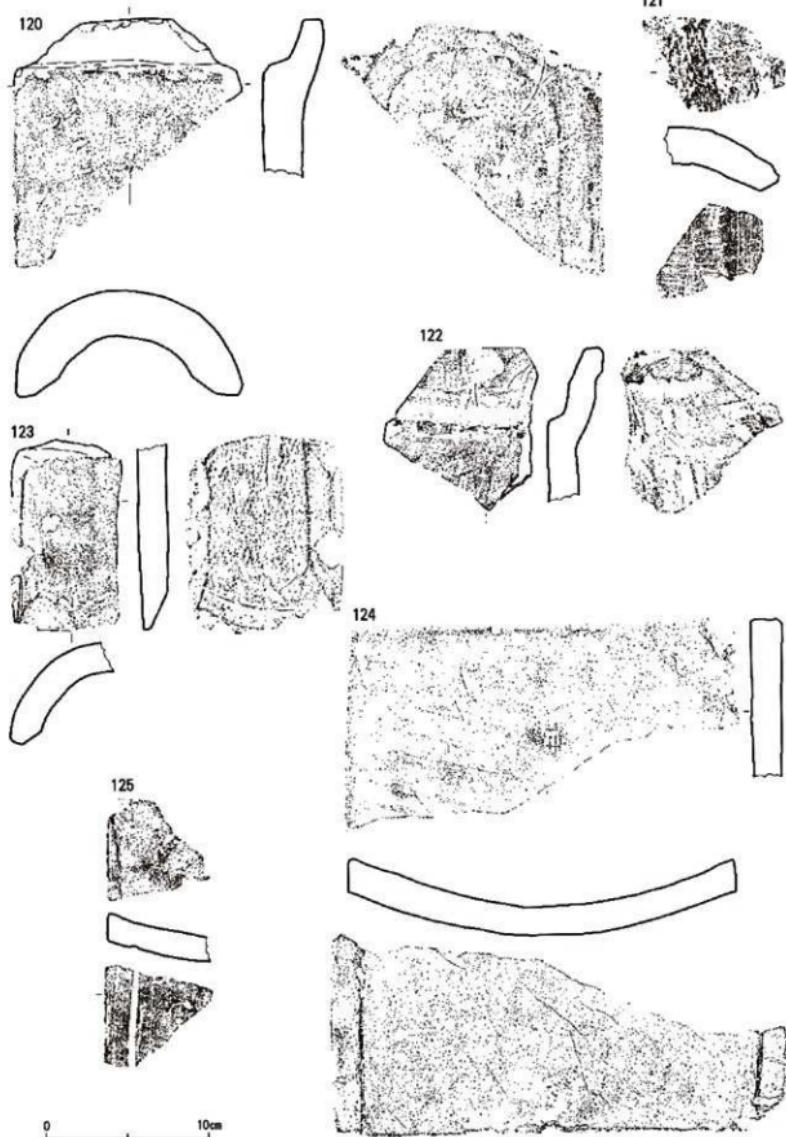
第13図 SK2005 遺物実測図 2 (1/3)



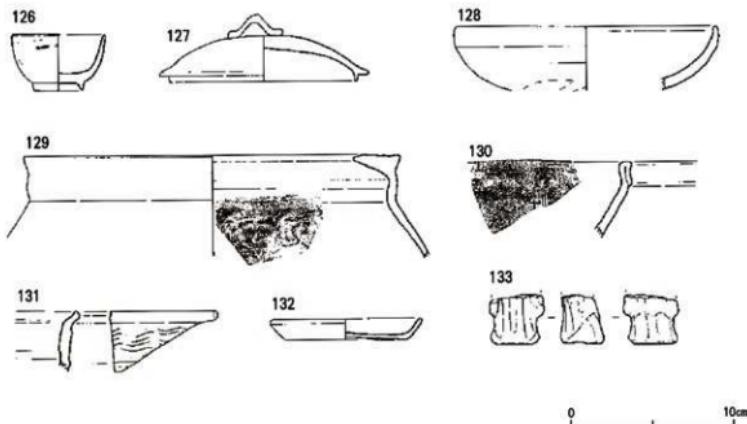
第14図 SK2005 遺物実測図 3 (1/3)



第15図 SK2005 遺物実測図 4 (1/3)



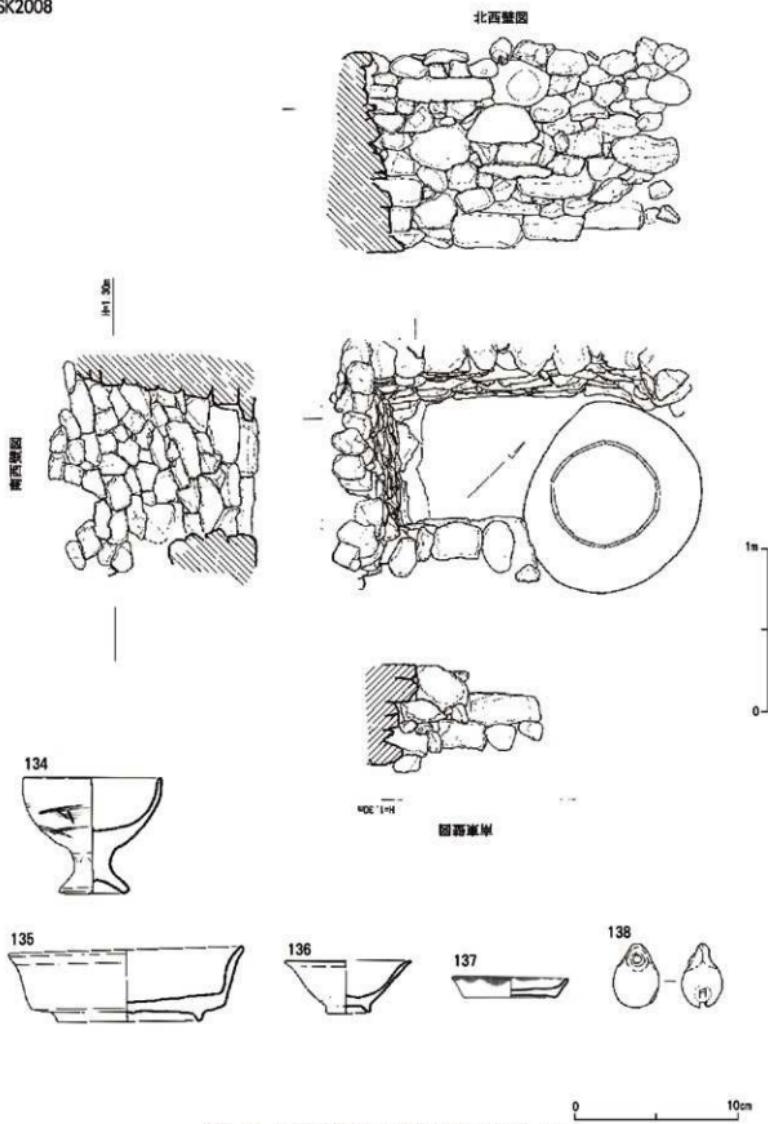
第16圖 SK2005 遺物夾測圖 5 (1/3)

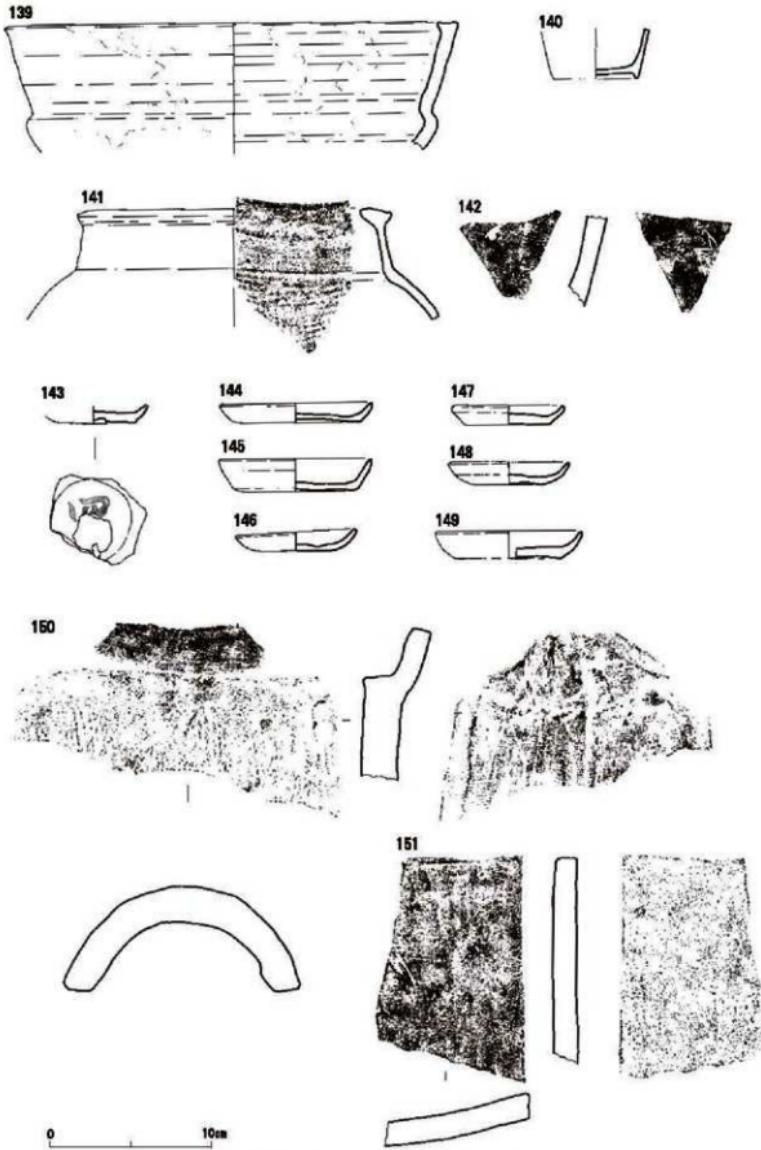


第17図 SK2006 遺物実測図 (1/3)

線を施す。074・075は陶器鉢で共に灰色を呈し白色の櫛刷毛文を施す。076～078は陶器擂鉢である。079は陶器大甕で暗褐色～赤褐色を呈し、肩に円形浮文を張り付ける。胎土は赤褐色を呈し、白色砂を多く含む。内面肩部に格子タタキが残る。080は唐津系陶器擂鉢、081～084は瓦質火鉢で082は淡黄褐色を呈し外面に唐草文の線刻を施す。083は復元口径23cmを測る。色調は灰～黒色を呈し、内外両面に煤が付着する。084は復元口径38cmを測る。灰黒色を呈し、外側面がナデの他は前面にハケメを施す。085は七輪の火皿である。上面はハケメを施し淡褐色、下面は灰色を呈す。086・087は土師杯、088～113は土師皿である。088・089と112～114は灯明皿として使用している。灯明皿が多く出土するのは地下室用か。114は土鍋で両面に強いハケメを施す。115は土師質甕口縁、116は底面が無く、七輪もしくは竈と思われる。淡褐色を呈し外面はナデ、内面は横方向のハケメを施す。117～119は丸瓦瓦当である。120～123は丸瓦、124・125は平瓦で124は凹面に1.4×0.8cmの格子のスタンプを押す。SK2005からは他に一錢銅貨が2枚出土しているが、SK2005の埋没時期を明治以降とするその後築かれたSK2008とSK2009の時期が新しくなりすぎるため、上層からの紛れ込みと考える。126～133はSK2006から出土した。126は染付の盃で復元口径5.8cmを測る。127は青磁の蓋で、胎土は白色で黑色粒子を含む。口縁部は露胎である。128は陶器鉢で復元口径16cmを測る。釉は僅かに緑をおびる灰色を呈し、胎土は灰色で白・黒色粒を多く含む。129は陶器甕で外面は暗褐色、内面は黄褐色～赤褐色を呈す。口縁上面は露胎である。内面肩部に同心円状の當て具痕が残る。130は陶器擂鉢で釉は赤褐色を呈す。131は火入で外面の釉は青緑～黒褐色を呈し口縁下に波状文を施す。132は回転糸切りの土師皿で口径9.4cmを測る。133は素焼きの人形である。淡黄褐色を呈し、胎土中に細砂を含む。SK2008(第18図)調査区中央に位置する。主軸はN-45°-Eを測り南側隣地境界線とほぼ並行する。東壁全体と南壁の半分をSE1007によって破壊される。石室の規模は長辺190cm、短辺100cm、深さ130cmを測る。石積みは北西壁が花崗岩、蛇紋岩、安山岩を主とし、砂岩を若干含む。ほとんどが円礫で、一部の石は面取りをしている。南西壁は砂岩、礫岩の角礫を主とし、若干安山岩の円礫を含む。下の2～3段は面取りをしているが、上半は自然面を利用している。南東壁は破壊されて高さ60cmのみ遺

SK2008





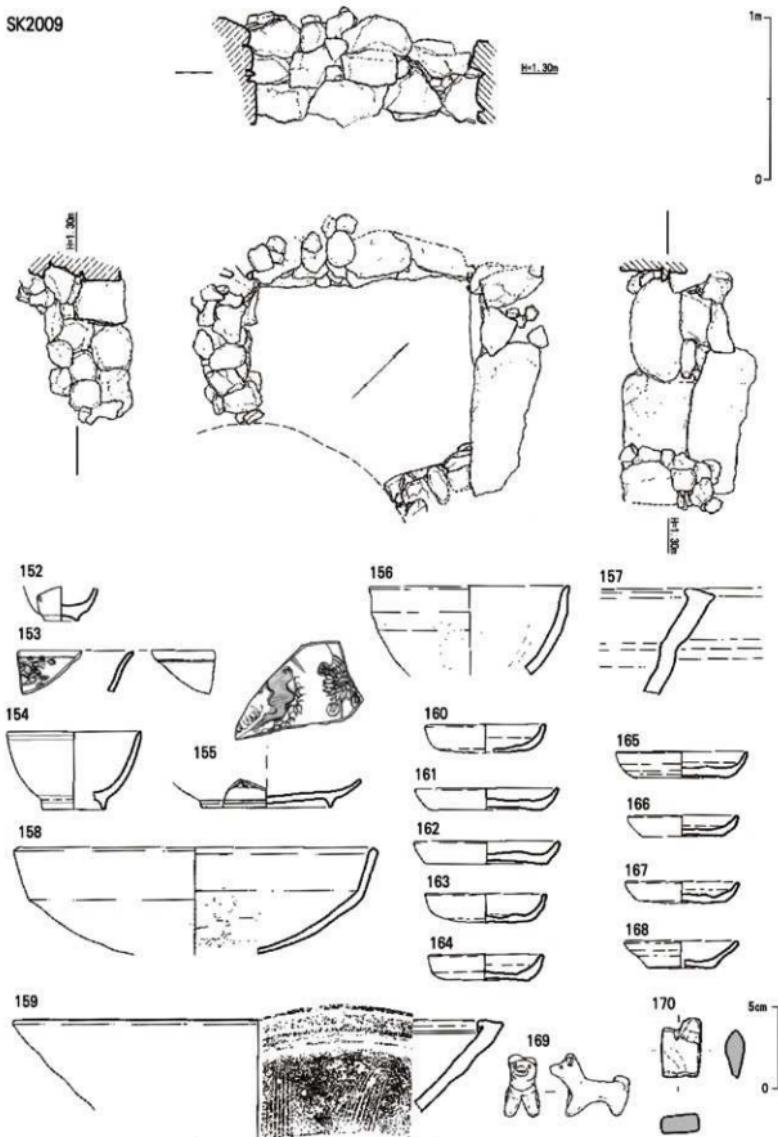
第19圖 SK2008 遺物実測図 (1/3)

存する。礫岩の角礫と安山岩の円礫を使用する。北西壁は比較的大きな石を使用し、大小の石を組み合させて石材間の隙間が小さいなど丁寧な石積みである。それに対し南西壁は下から2段は平らな石を水平に積んでいるが、上半2/3は石の底面が斜めに傾いており、また石材間の隙間が大きく石の積み方は雑な印象をうける。出土遺物(第18・19図134～151)。第18図134～138は石積み裏込めから出土した。134は仏壇器で外面に染付を施す。135は白磁皿、136は陶器皿で釉は淡灰色、胎土は灰白色を呈す。137は土師皿で口径7.1cmを測り、灯明皿として使用している。138は土鉢である。第19図139～151は石室内から出土した。139は火入で明～暗褐色釉の上に白色釉を斑にかけている。140は白磁の猪口で底径5.2cmを測る。141は陶器甕で暗褐色を呈す。外面は横ナデ、内面には格子目タタキが残る。142は瓦質火鉢である。143～149は土師皿で143は外底部に墨書きがある。表面が剥がれて文字の一部が無いが、「四」と思われる。145は底部端を焼成後内面から穿孔する。147は灯明皿で口縁端に煤が付着する。150は須恵質丸瓦で凸面は繩目タタキ、凹面は布目圧痕が残る。151は土師質平瓦で凹面はナデ、凸面はハケメである。淡灰黄褐色を呈す。その他大型の椀型滓が数個出土した。SK2009(第20図) 調査区中央東寄りに位置し、主軸はN-44°-EでSK2008とはほぼ同じである。南側角が後世の掘り込みで破壊されている。石室の規模は長辺130cm、短辺120cm、深さ80cmを測る。石室の北東壁と北西壁は直線であるが、南東壁と南西壁は中央部が膨らんでおり、緩やかにカーブを描く。使用する石材も北側が大きく、特に北東壁が古墳石室の様な大きな石材を使用しているのに比べ、南西壁の石材は最下段に多少大きな石を使用するものの、上側は径20cm前後の小型の石を使用する。出土遺物(第20～21 図152～183)。152～170は埋土上半から、170～183は埋土下半から出土した。152は盃である。灰白色を呈し淡青色の染付を施す。153・154は染付碗、155は染付皿である。156は陶器碗で明褐色釉の上から部分的に黒褐色釉を施す。胎土は灰白色を呈す。157・158は瓦質鉢で、157は暗灰色を呈す。158は暗灰褐色を呈し調整は内面口縁がハケメ、胴部がミガキ、外面は上半がナデ、下半は摩滅のため不明である。159は瓦質鉢で暗灰色を呈す。外面は横ナデを施す。160～168は土師皿である。底部は回転糸切りで(160は摩滅のため不明)、163は板状圧痕を施す。163・166・167は口縁に煤が付着しており、灯明皿として使用している。169はイヌ型土製品で全長4.8cm、高さ3.8cmを測る。170は滑石製品である。171は青白磁碗で僅かに灰色をおびる薄い水色を呈す。172は染付皿、173は白磁製の龜で全長6.5cmを測る。174は陶器片口捕鉢で赤褐色を呈す。胎土は暗灰色で白色細砂を含む。175は陶器捕鉢で暗褐色を呈す。176は陶器小鉢である。釉は暗褐色で胎土は少し灰色をおびる淡赤褐色で白色細砂を含む。177は土師質で器壁から内側に角状の突起が伸びる。瘤もしくは火鉢か。外面は黒褐色、内面は少し灰色をおびる淡褐色を呈す。178は陶器壺で釉は明褐色を呈す。179は瓦質火鉢で復元最大径33cmを測る。胴部下半に穿孔を施す。180～182は糸切りの土師皿で182は灯明皿として使用している。183は瓦質平瓦で黒褐色を呈す。凸面は僅かにタタキ痕が残る。凹面はナデである。その他には炉壠、鉄滓、羽口等が出土した。近世には近辺で釜の鋳造が行われていたとされており、それに関連する遺物の可能性がある。

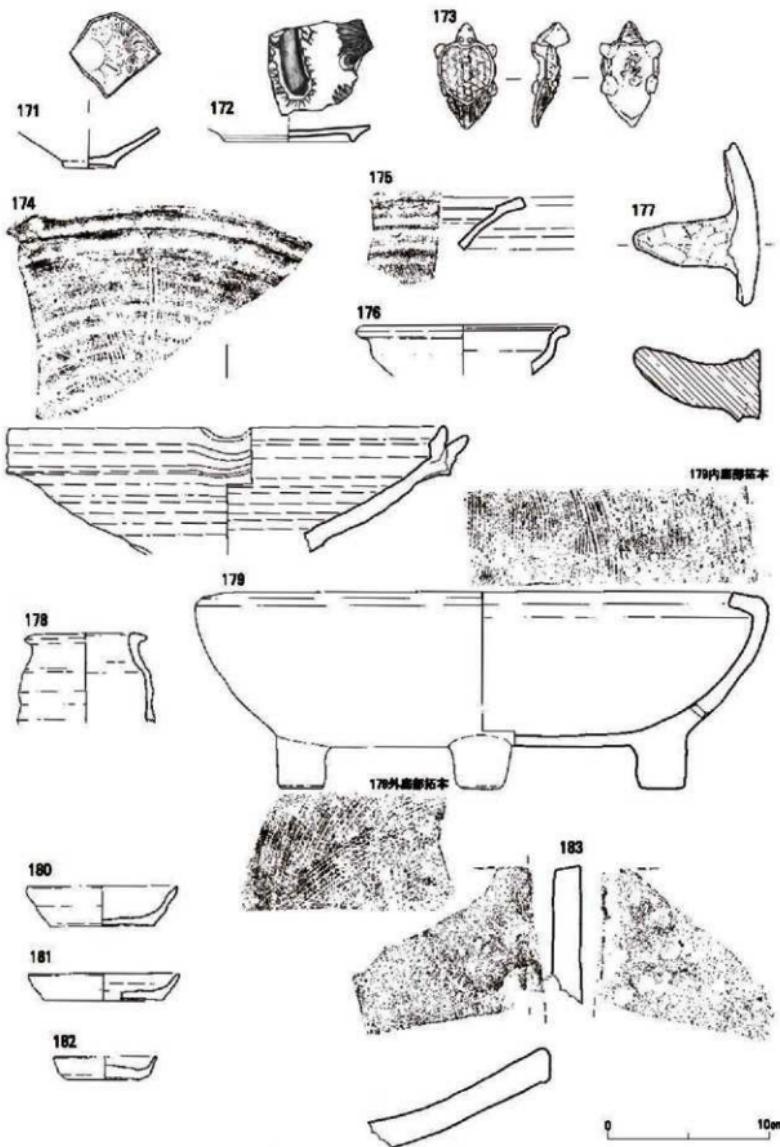
5) 土師坏廐棄土坑

SK2010(第22図) 調査区東端部に位置し、第2面から3面への掘り下げ中に遺構を確認した。東側をSK2012に、西側をSK2014に切られ、本調査区内で確認した中では古い遺構のひとつである。掘り方は不明であるが、土器の出土状況から掘り方は径80cm程の円形であると思われる。出土遺物(第22図184～216)。小片が多く、復元できたのは土師坏26枚、土師皿7枚である。底部切り離しは糸切りで土師坏の口径は10.2～11.6cmで平均10.7cm、土師皿は口径6.0～7.1cmで平均6.6cmを測る。185・188・193・200・201・204・213・215には板状圧痕がみられる。16世紀代か。

SK2009

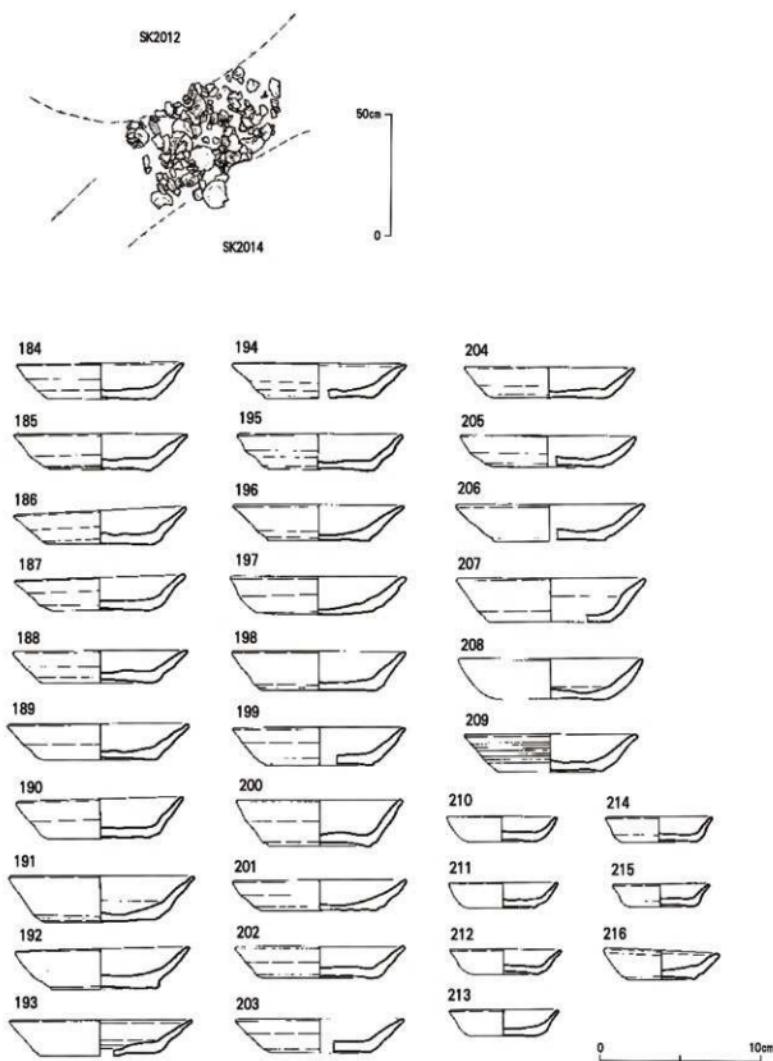


第20図 SK2009 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)



第21図 SK2009 遺物実測図 (1/3)

SK2010



第22図 SK2010 遺構・遺物実測図 (1/20・1/3)

6)土坑

SK2003(第23図) 調査区西端の第2面で検出した。西端は調査区外に延びる。東側は2004に、中央を根石が入った柱穴に切られる。平面は不整円形を呈し、南北長は124cm、検出面からの深さ31cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土で一部に炭化物を含むが、境界は漸移的で明確な線は引けない。遺物は陶器片(3点)、土鍋小片、土師皿・壺小片(糸切り)が出土した。遺物が少ないので時期を明確にはできないが上層の遺構が多量の近世陶磁器を含むのに対し、明確な近世陶磁器は含まない。

SK2004(第23図) 調査区西端の第2面で検出した。SK2003を切る。平面形は隅丸方形を呈し、径116cm、深さ106cmを測る。底面中央に径30cm、深さ10cmの逆台形の掘り込みがある。出土遺物(第24図217~223)、217は染付鉢、218は白磁碗、219は白磁皿である。220は動物型土製品で馬と思われる。221~223は土鉢である。その他には瓦質の壺や片口鉢、褐釉陶器擂鉢、須恵質擂鉢(備前)、陶器(唐津)鉢、白磁皿(複数個体)、染付盃、染付碗、龍泉窯系青磁碗II類、土師壺・皿(糸切り)、土師質丸瓦(凸面工具によるナデ、凹面は強いナデ)、土師質平瓦(凸面はナデ、凹面はケズリ)等が出土した。いずれも小片である。

SK2011(第23図) 調査区東側で検出した。SD2017に切られる。調査区北側に伸びておらず、全容は不明である。検出面からの深さは9cmを測る。図面ではSK2014と繋がりそうであるが、底面の高さが全く異なる。覆土中から茶褐釉陶器、須恵器、土鍋、瓦質擂鉢、土師壺・皿(糸切り)が出土した。いずれも小片で器形等は不明である。近世と思われる遺物は出土していない。中世未か。

SK2012(第5図) 調査区北東隅の第2面で検出した。ほとんどが調査区外であるため、規模は判明しないが平面は梢円形を呈し、直径1.5m前後と推定される。遺物は出土していない。

SK2013(第23図) 調査区の北端に位置する。2面目で検出したが輪郭が明確ではなく、3面目で確定したので、図は3面目に記載した。遺構の大半が調査区外に伸びる。調査区内で南北2m前後を測り、検出面からの深さ86cmを測る。遺物は白磁碗、陶器壺底部、土師質鉢、土師質大鉢、須恵器(青海波紋)、土師壺・皿(糸切り)、土鍋などが出土した。いずれも小片で図化できない。土師質大鉢は一部の破片しか出土しておらず不明な部分が多いが、博多171次の近世井戸から出土した瓦質の井戸枠に似た部分があり、時期としては近世まで下る可能性がある。

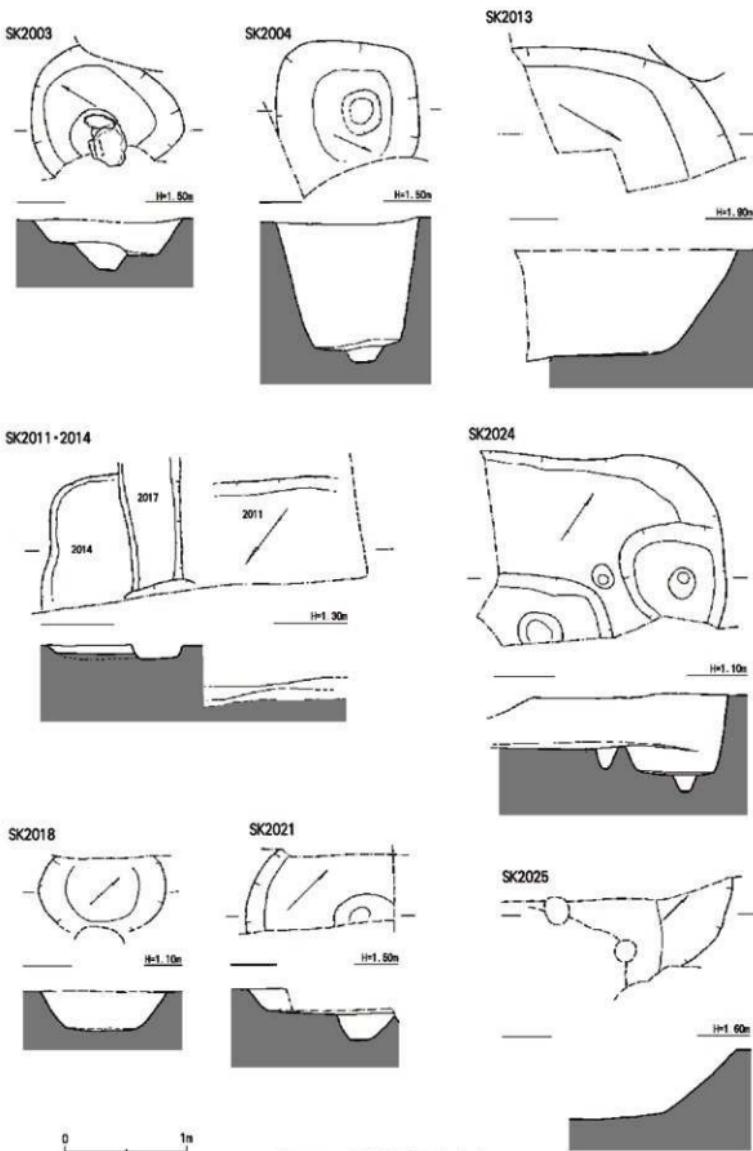
SK2014(第23図) 調査区東側の第2面で検出した。SD2017に切られる。検出面からの深さは2~6cmを測る。遺物は土師壺・皿(糸切り)と土鍋が出土した。いずれも小片で図化できない。

SK2018(第23図) 調査区東端部の第3面で検出した。平面は梢円形を呈し、長径は104cmで検出面からの深さ31cmを測る。遺物は土器小片1点のみである。

SK2021(第23図) 調査区中央西寄りの第3面で検出した。SK2006(石積土坑)に切られる。3方を切られているため規模等は不明であるが、現状で長さ123cmを測り、検出面からの深さ22cmを測る。底面中央に径50cm前後、深さ20cmの柱穴状の掘り込みがある。遺物は土師質の土器片3点のみで、遺構の時期は不明である。

SK2024(第23図) 調査区西端の第3面で検出した。西側と南側が調査区外に延びる。現状で東西2.3m、南北1.5mを測る。検出面からの深さは45cmを測る。底面の東端と南側に深さ20cm程の不整形の掘り込みがあり、更にその底面中央で径25~35cm、深さ10~14cmの掘り込みを確認した。遺物は染付、土師壺・皿(回転糸切り)が出土した。いずれも小片で図化できない。

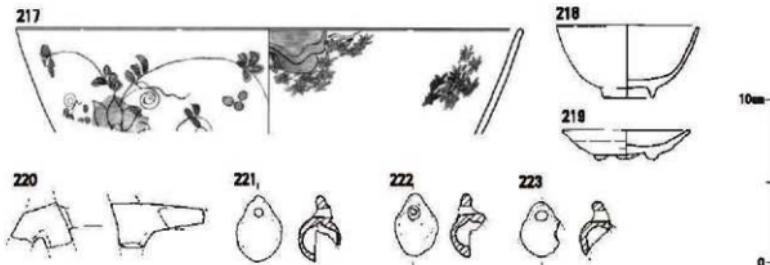
SK2025(第23図) 調査区西側の第3面で検出した。SK2024とSK2005に切られる。平面形や規模は不明で、現状では主軸方向で長さ1.5m、検出面からの深さ54cmを測る。遺物は出土していない。



第23図 土坑実測図 (1/40)

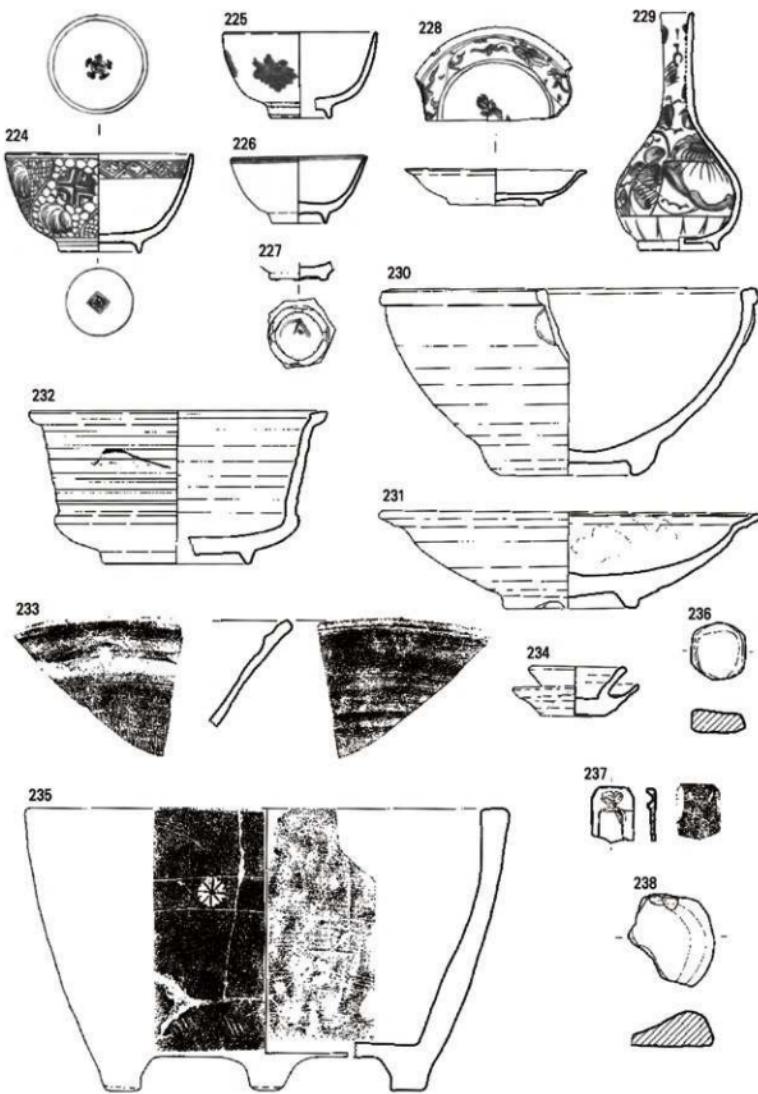
7) その他の出土遺物

1. 包含層出土遺物 1~2面間出土遺物(第25~26図224~261)。224は磁器碗で外面に青色の染付を施す。見込みに五弁花文を描く。225は染付鉢で復元口径9.5cmを測る。釉はやや褐色をおびた灰白色で、外面に灰色の桐文を施す。226は小碗で口径8.3cmを測る。胎土は白色で黒色微粒子を少量含む。釉は僅かに灰色をおび、口縁に薄茶緑の染付を施す。227は白磁碗底部で高台径3.6cmを測る。外底部に記号と思われる墨書きがある。228は染付皿で内面に唐草文を描き、229は染付瓶で口径2.1cm、器高14.6cmを測る。胎土は白色で緻密、黒色微粒子を僅かに含む。釉は僅かに灰青をおびた白色で、染付は青の濃淡で草花文を描く。230は陶器鉢で復元口径23.2cmを測り、注口が付く。胎土は淡灰赤褐色で砂粒を多く含む。釉は暗褐色を呈す。外面脚部下半は露胎である。231は陶器鉢で口径23.5cmを測る。釉は口縁外端~内面のみで赤褐色釉の上から一部暗灰褐色釉をかける。外面露胎部分は淡黄褐色を呈す。232は火入で復元口径18.4cmを測る。胎土は淡黄茶褐色を呈し細砂を含む。釉は淡黄茶褐色を呈し淡青色で文様を描く。内面は露胎で底部中央に焼成後の穿孔がある。233は陶器擂鉢で胎土は明褐色、釉は暗褐色を呈す。234は陶器製灯火具で上部口径6cmを測る。赤褐色を呈す。235は土師質の火鉢で復元口径29.8cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、調達は内面がナデ、外表面はハケメの上からナデ、外底部はハケメである。肩部外面中央に沈線を2条巡らし、その間にスタンプを施す。236は瓦玉で径3.5cmを測る。灰色~黒色を呈す。237は泥岩製の硯のミニチュアで淡黄褐色を呈す。残存長3.7cmを測る。表面は比較的丁寧に研磨しているが海や陸などの影りは雜である。裏面に線刻で「天口一天・」の文字を刻む。238は蛭石製品でもとは円形を呈したと思われる。推定径6cm前後か。平坦面を削り出しているが、片方だけが厚くなってしまって用途は不明である。239は瓦質の釜か。復元口径17.6cmを測る。黒色を呈す。両面にハケメを施す。240~255は土師皿でまとめて出土した。口径は①8.9cmを越える240~243・249と②8cm以下のものに分かれる。①の平均は9.3cm、②の平均は7.08cmを測る。249~255は灯明皿として使用されている。中世末頃か。256は軒丸瓦の瓦当である。瓦当径は14cm弱を測り、瓦当文は巴文を施す。257~258は土鈴である。257は推定最大径6.5cmで少し灰褐色をおびた淡褐色を呈す。258は推定最大径6cm前後を測り、淡黄褐色を呈す。259は動物型土製品である。胴が長く首を上に伸ばしており、馬と考えられる。淡褐色を呈し、焼成は軟質である。全体にナデを施す。260は磁器色絵の馬の頭部で鼻先を欠損する。胎土は白色で透明釉をかけた後、タテガミや目の前側と頬の飾りは黒、手綱や喉元や鼻先を回る綱や首に下がる房とその後側の飾りは赤、頬革と項革は緑、鞍頭は青の彩色を施す。261は黄褐色~暗茶褐色の瓦で蓋甲と思われる。横筋の歯か。

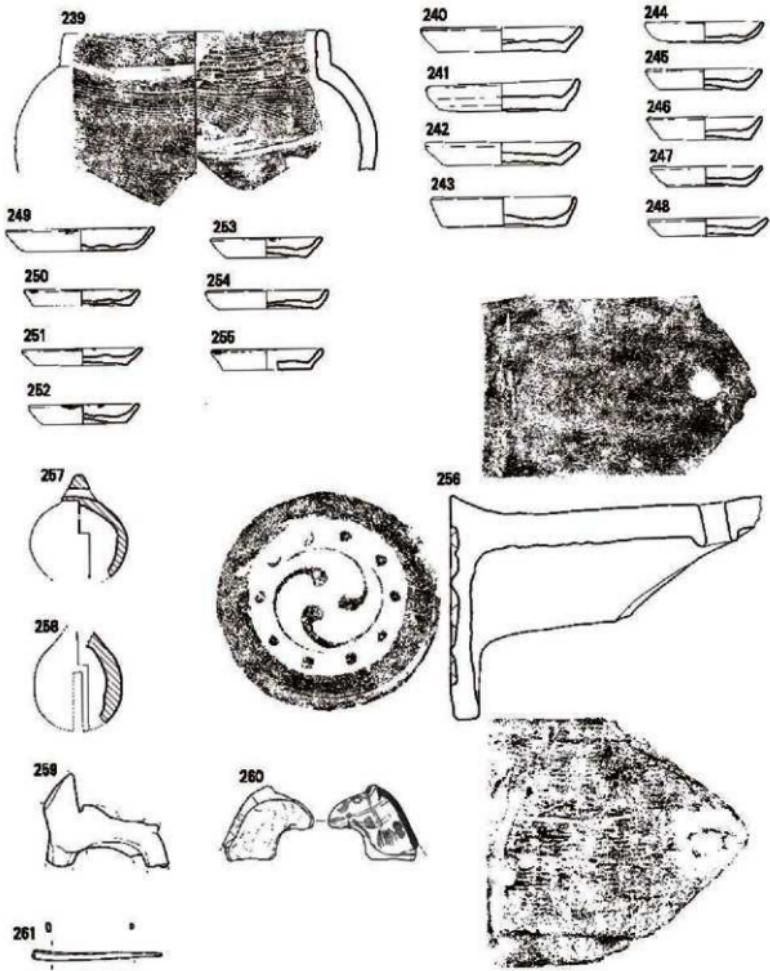


第24図 SK2004 出土遺物実測図 (1/3)

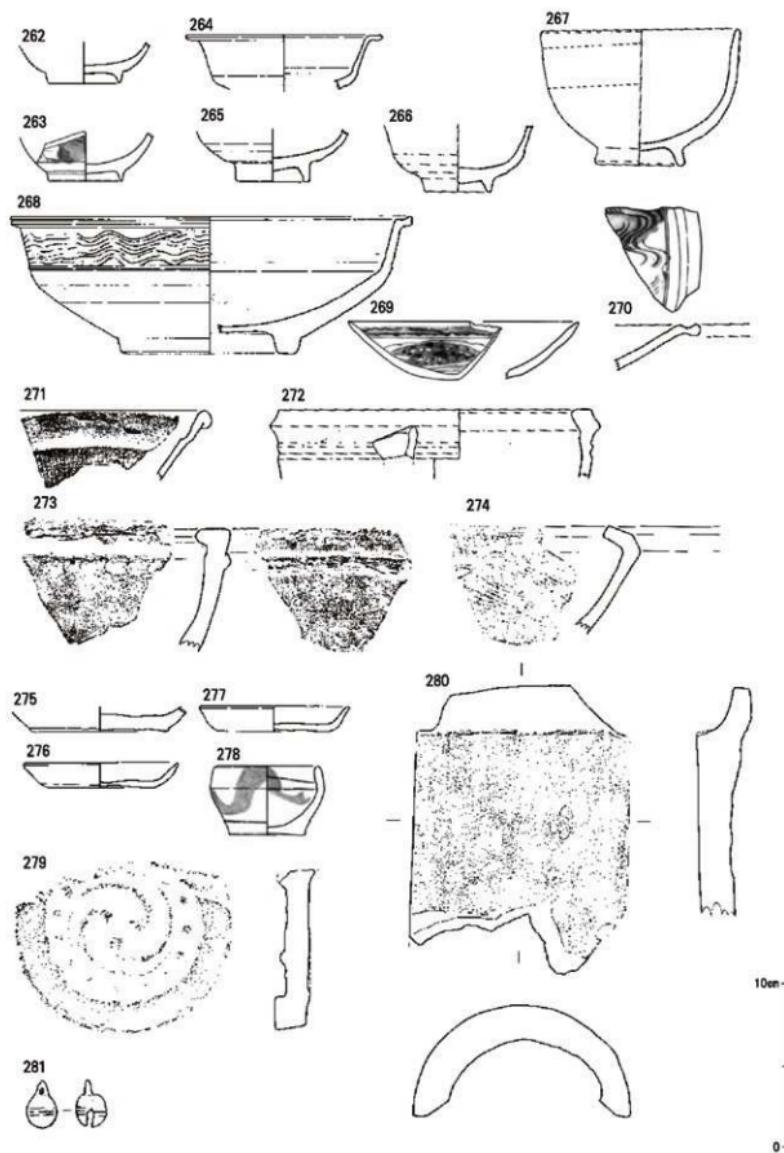
262～281(第27図)は第1面のトレンチ出土遺物で、これは1～2面間出土に相当する。262は白磁碗底部で高台復元径4.4cmを測る。胎土は白色で黒色微粒子を少量含む。263は染付碗である。264は陶器火入か。復元口径12cmを測る。胎土は灰白色で釉は淡灰色を呈す。内底部は露胎である。265は陶器碗で高台径4.5cmを測る。釉は灰～暗灰色で、胎土は暗灰色を呈す。266は陶器碗で高台径4cmを測る。釉、胎土共に灰色を呈す。内底部に砂が付着し、疊付きは釉を掻き取る。267は陶器碗で口径12.1cmを測る。釉は薄黄褐色で胎土は灰白色で砂を少量含む。疊付きに砂が付着する。268は火入で復元口径24.4cmを測る。口縁と外面上半のみの施釉で、外面は白化粧土の上に波状文を施す。269は染付の鉢か。口径は26cm前後である。外面は淡灰色で灰～黒色の染付を施す。270は陶器鉢で胎土は赤褐色を呈す。釉は外面が茶緑色で口縁部のみ施釉、内面は黄褐釉である。271は陶器擂鉢で褐色を呈す。釉は口縁部のみ施釉で、濃い褐色を呈す。胎土は赤褐色で白色細砂を少量含む。272は陶器製水注で口径19cmを測る。口縁下3cmに注口と耳が付く。胎土は少し灰色をおびた赤褐色で白色砂を少量含む。釉は外面黒褐色、内面は暗褐色釉で上から灰色釉を全体的に斑にかける。273は瓦質火鉢で暗灰褐色～淡灰褐色を呈す。274は瓦質火鉢である。外面口縁端はミガキで副部は不明、内面はハケメを施す。黒褐色を呈す。275は糸切りの土師壺で底径8.4cmを測る。少し赤みをおびた淡褐色を呈し、胎土に白色砂粒を多く含む。276・277は糸切りの土師皿である。276は復元口径9.2cmで明橙色を呈す。277は口径9.5cmを測る。明赤黄褐色を呈す。278は土師質の小鉢で復元口径6.5cm、器高4.2cmを測る。黄～赤褐色を呈し、内外面とも帶状に煤が付着する。全体に横ナデを施し、底部は糸切りである。279は軒丸瓦の瓦当で径13.2cmを測る。灰色を呈す。瓦当文は巴文である。280は丸瓦で暗灰色を呈す。凸面にスタンプが有る。281は銅製の鉛である。高さ2.9cm、幅1.8cmを測る。胸部中央に3本の沈線があり、中に径0.8cm程の玉が入っている。282～297(第28図)は1面で検出したSK1004の出土遺物で1～2面間出土遺物よりも若干新しくなる遺物である。282は染付瓶である。釉は淡褐色を呈し、肩部に花文を淡～濃青色で描く。283は染付碗で復元口径9cmを測る。灰白色を呈し外面に淡青～濃青で花文を描く。284は染付碗で復元口径10cm前後を測り、胎土は黄味をおびた灰白色を呈す。釉は淡灰褐色で外面口縁下に『寿』を黒色で描く。285は染付碗である。口縁端が僅かに弧を描く輪花碗で外面は淡灰綠色を呈し、内面は唐草文を描く。286は青磁の香炉で復元口径は5.4cmを測る。胎土は灰白色で釉は少し緑をおびた淡灰色を呈す。内面は口縁以外露胎である。底部は高台の他に脚が3箇中2箇遺存する。脚の1個は高台より短く、宙に浮いた状態である。287は磁器皿である。高台径5.9cmを測る。胎土は白色で黒色微粒子を少量含む。釉は外面が灰黄をおびた白色、内面が緑をおびた濃青色を呈す。内底部は釉を環状に掻き取り、目跡が残る。288は白磁皿で復元口径12.8cmを測る。胎土は白色で黒色微粒子を含み、釉はやや緑をおびた灰白色を呈す。内底部は釉を環状に掻き取る。289は青磁皿で高台径は5cmを測る。胎土は淡灰色で釉は淡青灰色を呈す。高台内も施釉しているが内底部と疊付きは釉を掻き取る。290は陶器壺である。復元口径15.2cmを測る。胎土は赤褐色～暗灰色で白色砂を多く含む。釉は暗赤褐色を呈し、口縁上面と外底部は露胎である。291は陶器水注で復元口径20.2cmを測る。胎土は僅かに灰色をおびる赤褐色で、白色粒や赤色粒を含む。釉は暗褐色を呈し、外面は全面に施釉、内面は口縁端のみ施釉する。292～295は陶器擂鉢である。292は復元口径約30cmを測る。胎土は少し灰色をおびた暗赤褐色で、釉は暗褐色を呈し口縁のみに施す。293は少し灰色をおびた淡赤褐色を呈す。294の釉はわずかに赤味をおびた暗褐色を呈し口縁のみの施釉。露胎部分は淡褐色を呈す。295は口径17.6cmを測る。外底部まで全面に施釉しており暗赤褐色を呈す。完形品である。296は瓦質で磚と思われる。淡灰褐色で厚さ3cmを測る。焼成前の穿孔がある。297は土師皿である。糸切りで口径6.8cm、器高1.1cmを測る。少し赤味をおびた淡黄褐色を呈す。



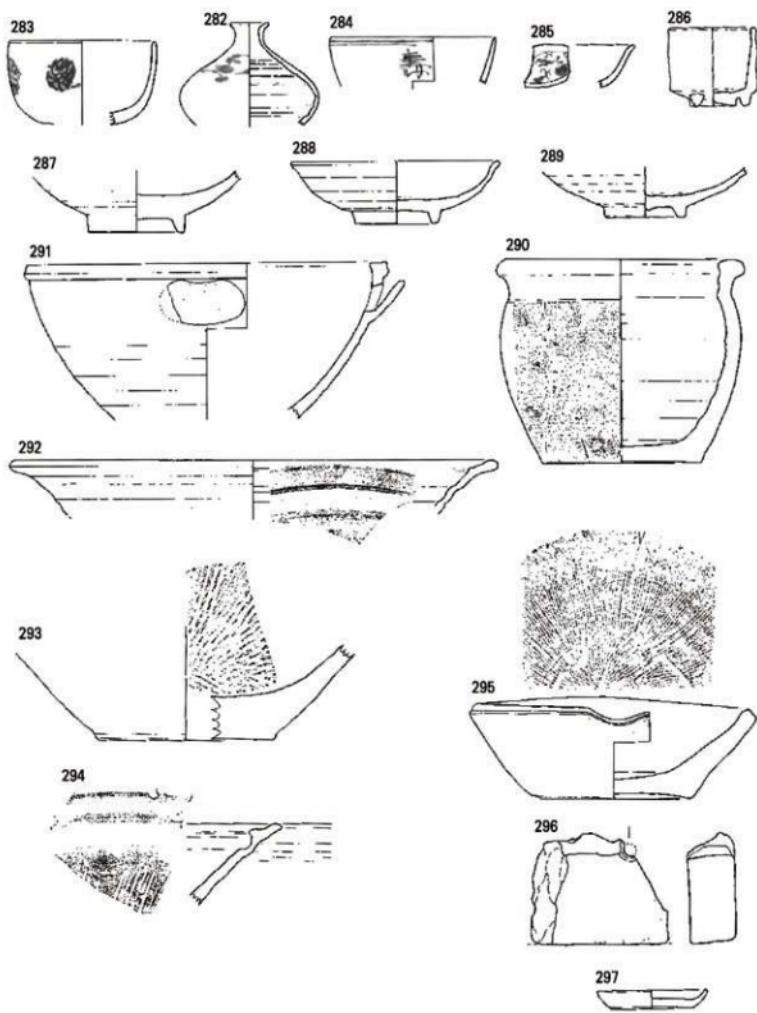
第25図 包含層出土遺物実測図 1 (1/3)



第26圖 包含層出土遺物夾測圖 2 (1/3)

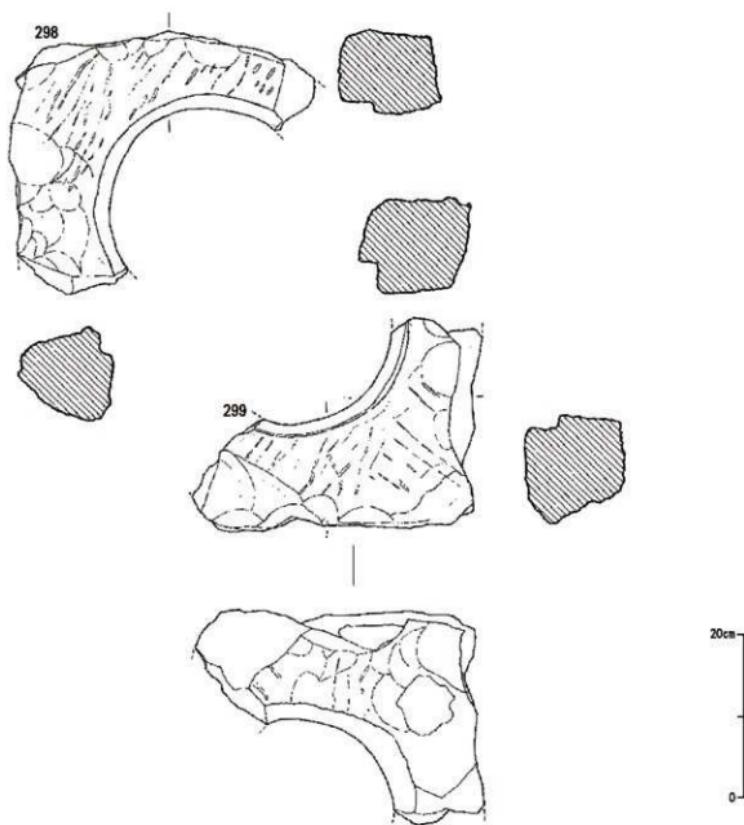


第27圖 包含層出土遺物実測図3 (1/3)



第28図 包含層出土遺物実測図 4 (1/3)

0 10cm



第29図 SK2008出土礎石実測図 (1/6)

2. 磂石(第29図 298・299)

SK2008北西壁の石積みの中に礎石片が2点含まれていた。石は粗い砂岩で同一個体と思われるが接点はない。平面は推定で1辺が40~50cmの不整形を呈し、中央に径25cm程の柱受けの穴を穿つ。柱受けの穴の内側には上部の縁から深さ3.5~4cmのところに幅1~1.5cmの段がつく。全体に整型時の粗い鑿痕が残っており、蓮華文の様な意図的に彫り込まれた文様はない。下面2ヶ所に矢穴がある。中央に柱をはめ込む孔を開けた礎石は寺院等で塔の芯礎として使われたものが出土しているが、今回出土したものは孔の径が25cm前後と塔の芯礎に使用するには小さい。博多遺跡群では掘立柱建物がほとんどで、礎石建物は第78次調査などでしか確認されておらず、重要な建物であった可能性が高い。礎石が再利用されたため時代が不明であるのは残念である。

3. 銅銭（表1 300～321） 全部で22枚が出土したが遺存状態が悪い。福岡市埋蔵文化財センターでクリーニング後X線で確認したものの、銭名が判明したものは8枚に止まる。銭名が判明した銅銭の初鋤年は包含層から出土した寛永通宝を除くと11世紀～12世紀前半である。出土状況としてはSK2008出土の7枚は1つの固まりとして出土した。近世後半の石積土坑にともなうには初鋤時が古い銅銭がまとまっているため、石室を埋めた土と共に外部から遊び込まれた可能性がある。

遺物番号	出土遺構	銅銭名	初鋤年	遺物番号	出土遺構	銅銭名	初鋤年
300	1004	不明		311	2008	元符通寶	1098年
301	1011	●●●寶		312	2008	不明	
302	1011	宣和通寶	1119年	313	2009	不明	
303	1011	不明		314	I 区1～2面掘下げ	寛永通宝	
304	2003	不明		315	I 区1～2面掘下げ	不明	
305	2005	不明		316	II 区1～2面掘下げ	不明	
306	2008	皇宋通寶	1038年	317	2010周辺掘り下げ	不明	
307	2008	熙寧元寶	1068年	318	南壁面	寛永通宝	
308	2008	元豐通寶	1078年	319	廃土	不明	
309	2008	元豐通寶	1078年	320	廃土	不明	
310	2008	紹聖元寶	1094年	321	廃土	不明	

表1 出土銅銭一覧

4. 銅製品 キセルの吸口や雁首がSK1010とSK2008、1～2面間包含層から出土した。その他にSD1007から銅線が、SK2005から1辺11cm前後の銅板が、SK2009から不明小片が出土した。

III 小結 中世後半まで遡る可能性がある遺構として溝と土師坏廃棄土坑を確認した。溝の方位は確認した距離が短いため、それを問題にすることは適當では無いかもしれないが、中世と思われる溝はSK2015・2016の主軸がN-33°-Wと現地割りのN-46°-Wと比べると若干のズレがみられる。しかし、近世後半の溝であるSD2017の主軸方向がN-37°-WとSK2015と現地割りの中間値になっており、一概に現地割りの方位が太閤町割り以来、近世前半から続いているとは限らないようである。遺構の時期がある程度判断できるものとしてはSD2015が最も古く、出土した遺物からは15世紀後半頃まで遡る可能性が考えられる。SD2015に切られる2016の他に、SK2021やSK2025など調査区の中で切り合いから古いと考えられる遺構の多くから遺物がほとんど出土しておらず、時期が不明なのは残念である。SD2016は波による堆積と思われる薄い黒色土と白色細砂の互層の直上から掘り込まれており、本調査地点が陸地化して間もない時期に掘り込まれたと考えられる。またSD2015がSD2016を掘り直していることから、この時期には周辺の区画が進んで街区が形成され、それが固定化していたことが想像でき、中世後半には元寇防壁の北側も市街化が進んでいたものと思われる。周辺の調査を密に行い、元寇防壁以北が街化していく時期がどこまで遡るかを確認する必要がある。

近世の遺構では石積土坑が3基と、近世陶磁器等が多く出土した廃棄土坑などがある。石積土坑は周辺の調査区でも多く出土するものであり、元寇防壁の石を再利用したと考えられている。SK2006が南西側に入口が開き、板で天井を覆っていたとすると倉庫として使用された可能性が高いと考えられる。遺物では土鈴や土馬等の祭祀に関わる遺物が数点出土した。土馬は水に関連する祭祀や厄よけのまじないに使用されることが多いと考えられているが、本調査区近辺では江戸時代に「古漢水」と呼ばれて火災避け靈験あらたかとされた井戸が存在したことや、近辺で水を多く使用する魚問屋が多かったとする話もあり、井戸に關係する祭祀で使用された遺物である可能性がある。

※参考文献 『古地図の中の福岡・博多』 宮崎克則編 海鳥社 2005年

『中世都市 博多を掘る』 博多研修会編 海鳥社 2008年

IV 博多遺跡群第187次調査出土の動物遺存体について

第187次調査では37点(遺物番号261の籠甲を含む)の動物遺存体が出土した(表2 322~357)。調査時に水洗選別等は行っておらず、遺構の掘り下げ時に手掘り採集したものだけである。36点中種類が不明な4点を除くと他はすべて海棲生物である。

哺乳類(15点) イルカ・クジラ類が11点出土しており、37点中の30%をしめる。出土部位が椎骨と肋骨であることや、哺乳類の大半がイルカ・クジラ類であるのは14世紀以降の博多遺跡群の他の調査区と同じである。イルカ・クジラ類の種は不明である。ほとんどは小型のイルカ程度の大きさであるが、351の椎骨は推定径が20cmを超える大型鯨類の尾椎である。また349はイルカ類の上肢骨のいすれかと思われる。その他に陸生哺乳類の骨が2点と白色化した不明細片が1点出土した。陸上哺乳類の2点は長骨と椎骨でイノシシ・シカ程度の大きさである。椎骨の方は骨端がまだ化骨化していない若い個体で横突起の根本部分に解体痕がある。

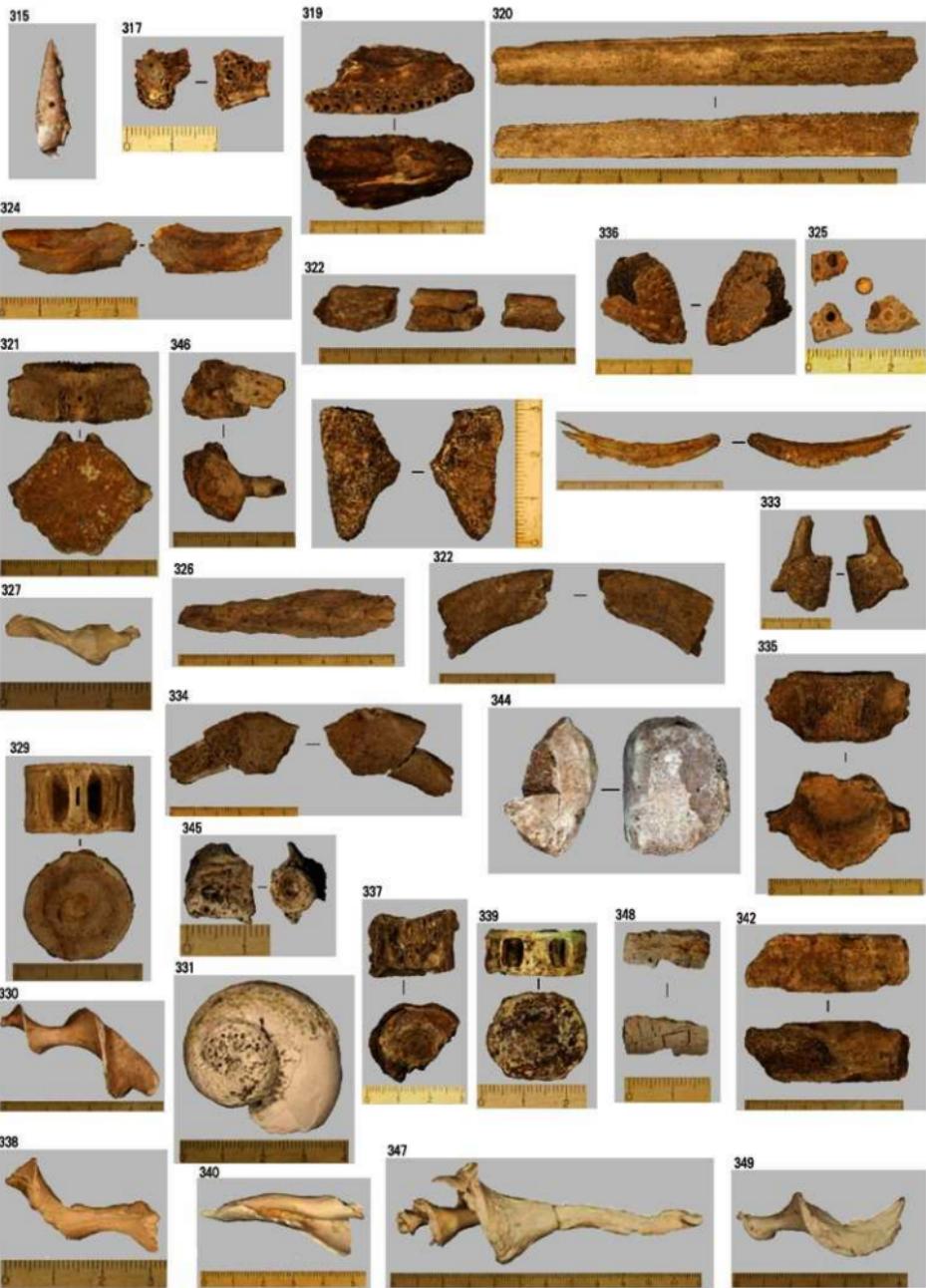
腹足類(8点) 巻貝が8点出土した。このうち322のホソウミニナは殻長3.4cmと小型で、殻側面に他の貝に捕食された小穴があるため、食用として持ち込まれたものではない。残りは小型~中型の巻貝であるが、種が判るのはツメタガイ1点とアカニシ2点のみである。他は軸柱のみの出土で、軸柱の大きさからアカニシやナガニシ等の可能性が高いと思われるが特定はできない。

魚類(12点) サメ・エイ目の椎骨3点、スズキ亜目(鰓類)の歯骨が2点、カジキ亜目の吻部が1点、種不明の大型魚類の歯骨が1点、種不明の小~中型魚類の椎骨が2点出土した。

出土した遺構の時期からこれらの動物遺存体は近世から近代のものが大半である。哺乳類の大部分がイルカ・クジラ類であるが、博多遺跡群では中世後半から哺乳類中の海獣類の割合が高く、それが近世から近代にかけても続くものと思われる。貝類は大型巻貝が多く、牡蠣など博多遺跡群の中世遺構からよく出土する二枚貝が見られない。近世~近代には東側に3km程離れた箱崎から剥き身の牡蠣を行商に来ていたという話もあり、それが影響している可能性もある。魚類はサメ・エイ類やタイ類など博多遺跡群で多く出土する魚類である。327はカジキ亜目の上顎部である。3mを超える大型魚で近海では日本海から東シナ海で獲れる。326は種は不明であるが1mを超すような大型魚である。

東シナ海由来か。大型魚が出土するのは積極的な沖合漁業が行われた結果と思われる。

遺物番号	地区	地層	大分類	小分類	学名	石名	部分	成長度	性別	特徴	標名	整理番号	時代
322	1回廊		腹足類	ホソウミニナ		貝殻	底面	なし			026	近世末~近代	
323	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		小片					011	近世末~近代	
324	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	不明			013	近世末~近代	
325	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	不明			014	近世末~近代	
326	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	不明			015	近世末~近代	
327	1区	1~2階壁下部	魚類	カジキ亜目	下顎	右	口縫合部付近	大型	雄	右は逆刀による切歯	016	近世末~近代	
328	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			035	近世末~近代	
329	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			010	近世末~近代	
330	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			012	近世末~近代	
331	1区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			017	近世末~近代	
332	1区	2~3階壁下部	魚類	サメ・エイ類	(テリモチ)	底面	不規	なし			018	近世末~近代	
333	1区	2~3階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			016	中世後半~近世	
334	II-2区	1~2階壁下部	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			024	近世末~近代	
335	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			023	近世末~近代	
336	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			024	近世末~近代	
337	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			025	近世末~近代	
338	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			004	近世末~近代	
339	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			030	近世末~近代	
340	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			021	近世末~近代	
341	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			022	近世末~近代	
342	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			023	近世末~近代	
343	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			024	近世末~近代	
344	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			025	近世末~近代	
345	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			032	近世	
346	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			024	近世末~近代	
347	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			025	近世末~近代	
348	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			026	近世末~近代	
349	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			027	近世末~近代	
350	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			028	近世末~近代	
351	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			029	近世	
352	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			030	近世	
353	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			031	近世	
354	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			032	近世	
355	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			033	近世	
356	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			034	近世	
357	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			035	近世	
358	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			036	近世	
359	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			037	近世	
360	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			038	近世	
361	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			039	近世	
362	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			040	近世	
363	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			041	近世	
364	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			042	近世	
365	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			043	近世	
366	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			044	近世	
367	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			045	近世	
368	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			046	近世	
369	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			047	近世	
370	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			048	近世	
371	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			049	近世	
372	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			050	近世	
373	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			051	近世	
374	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			052	近世	
375	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			053	近世	
376	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			054	近世	
377	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			055	近世	
378	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			056	近世	
379	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			057	近世	
380	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			058	近世	
381	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			059	近世	
382	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			060	近世	
383	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			061	近世	
384	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			062	近世	
385	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			063	近世	
386	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			064	近世	
387	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			065	近世	
388	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			066	近世	
389	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			067	近世	
390	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			068	近世	
391	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			069	近世	
392	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			070	近世	
393	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			071	近世	
394	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			072	近世	
395	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			073	近世	
396	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			074	近世	
397	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			075	近世	
398	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			076	近世	
399	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			077	近世	
400	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			078	近世	
401	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			079	近世	
402	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			080	近世	
403	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			081	近世	
404	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			082	近世	
405	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			083	近世	
406	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			084	近世	
407	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			085	近世	
408	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			086	近世	
409	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			087	近世	
410	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			088	近世	
411	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			089	近世	
412	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			090	近世	
413	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			091	近世	
414	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			092	近世	
415	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			093	近世	
416	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			094	近世	
417	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			095	近世	
418	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			096	近世	
419	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			097	近世	
420	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			098	近世	
421	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			099	近世	
422	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			100	近世	
423	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			101	近世	
424	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			102	近世	
425	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			103	近世	
426	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			104	近世	
427	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			105	近世	
428	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			106	近世	
429	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			107	近世	
430	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			108	近世	
431	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			109	近世	
432	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			110	近世	
433	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			111	近世	
434	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			112	近世	
435	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			113	近世	
436	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			114	近世	
437	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			115	近世	
438	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面	不規	なし			116	近世	
439	1区	地盤	魚類	サメ・エイ類		底面							





1. 調査区全景（第2面 北東から）



2. 調査区全景（第3面 南西から）

図版2



1. I区2面（南西から）



2. II区東側2面（南東から）



3. SD2015・2016 土層（南東から）



4. SE1007 検出状況



5. SE1007掘り下げ状況（南東から）



6. SK2010 （西から）



1. SK1010 検出状況（南東から）



2. SK1010掘り下げ状況（南東から）



3. SK1011 土層（南東から）



4. SK2003（南東から）



5. SK2004（南東から）



6. SK2005 土層の一部（北西から）

図版4



1 . SK2006・2008・2009（南東から）



2 . SK2006・2008（南東から）



3 . SK2005（東から）



4 . SK2005 土層（南西から）



5 . SK2006（南東から）



6 . SK2006 石積み除去状況（南東から）



1. SK2008 (東から)



2. SK2008 南西壁



3. SK2009 (南東から)



4. SK2009 北西壁



5. SK2009 南西壁



6. SK2009 北東壁

図版6



1. SK2021 (北東から)



2. SK2024 (北東から)



3. SK2025 (南東から)



4. II区3面 (南西から)



5. II区東側北壁土層 (南東から)



6. SK2008 出土罐石

報告書抄録

書名	博多140
副書名	第187次調査報告
卷次	140
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1091集
編著者名	屋山洋 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会
作成法人ID	40134 発行年月日 2010年3月23日
郵便番号	810-8621 住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話番号	092-711-4667
所収遺跡名	博多遺跡群第187次
所在地	福岡県福岡市博多区奈良町100番、101番
コード	市町村 40132 遺跡番号 0121
北緯	33°35'37" 東經 130°24'21"
調査期間	20081001 ~ 20081107 調査面積 143m ²
調査原因	共同住宅の建設 種別 集落
主な時代	中世／近世
主な遺構	井戸 1基、土坑 多数、石積土坑 3基、溝 5条、柱穴 多数、
主な遺物	土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁、染付、中国陶磁器 朝鮮陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石製品、ガラス製品、銅鏡、銅製品 鉄釘、金属製品、鉄滓、炉壁、動物遺存体

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1091集

博多140

— 第187次調査報告 —

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アイオー企画印刷

福岡市南区柳原2丁目3番5号